

(論 文)

## 米西戦争におけるスペイン大西洋艦隊の迷走(2)

石 倉 幸 雄

---

### キーワード

- |   |             |   |                     |
|---|-------------|---|---------------------|
| 1 | スペイン艦隊の迷走   | 2 | スペイン政府の思いつきと当事能力の欠如 |
| 3 | 古習旧弊への惑溺    | 4 | スペイン一國史としての文脈       |
| 5 | 国際関係史としての文脈 |   |                     |
- 

### 1 はじめに

### 2 スペイン大西洋艦隊の迷走

- 2-1 戦争の準備
- 2-2 カデイス出航
- 2-3 ケープベルデ出航
- 付-1 関連地図
- 2-4 サンチャゴ・デ・キューバ
- 2-5 敗戦

### 3 セルベラ資料の吟味と評価

### 4 おわりに

#### 付-2 参考文献

(本論は2-4から付-2までを記載。1から付-1までは前号「米西戦争におけるスペイン大西洋艦隊の迷走(1)」に掲載)

#### 2-1 サンチャゴ・デ・キューバ

セルベラは取りあえずサンチャゴ入港の報告を、入港した日(5月19日)にブランコ・キューバ総督、マンテローラ海軍工廠司令官(ハバナ)、アウニオン海軍大臣(新任)等の関係当局へ打電する。折り返し同日付けで、マンテローラ海軍工廠司令官(ハバナ)、アウニオン新海軍大臣らからは早々と祝電が返電される。しかし、キューバで最高位の司令官ブランコ総督からの祝電はなかった。なぜかブランコはセルベラ到着の祝電を、セルベラにで

はなく、マドリッドのR.ヒロン植民地省大臣あてに送る。その事実をセルベラはスペイン帰還後に知る。サンチャゴでは、これまでもずっと彼にまわりついてきた整備不良と物資不足に、新たに加わった難問—キューバのブランコ総督との確執—が彼を待っていた。

島の主要港が米艦隊によって海上封鎖されていること、叛徒らによって島内の連絡路が寸断されていること等によって、サンチャゴにおける食料を主とする物資不足には非常なるものがあつた。コンカスによれば、町の商人の大半はスペイン人だったが、彼らはサンチャゴの陥落を予期してか、払ってくれるかどうか不確かな納品は、たとえそれが軍隊でもしようとはしなかったという。

陸軍は悪天候下での3年にも及ぶ戦いに疲弊しきっており、13ヶ月に及ぶ給与の支払遅延で、食料の調達もままならない様子だった。彼らは兵士と言うより亡霊と言った方がよいほどに衰え、スペイン人のあの頑固さがなかったなら、とうてい駐屯軍として踏み止まっていなかったであろうほどの衰弱ぶりであった。

市の防衛体制の実態については、“話にはならないほどの貧弱さで、たとえば、大砲については旧式のブロンズ砲とあって、かつてのイタリア戦役の後にフランスから取り寄せたもので、その効果たるや、(先方の敵を倒すのではなく) 当方の射手の命を無為に奪うしかないおそろべきもの”(コンカス)であった。

“港の入口では1724年製の刻印のある6インチブロンズ砲が6門すえつけられていた。確かに砲には旋条が施されて改良の跡も見られたが、砲台のある丘の頂きから眺めれば、敵はいつでもこの砲の射程外に身を置くことができた。海軍は1883年モデルのゴンサレス—オントリア砲4門を軍艦レイナメルセデス号からここへ移設、うち2門をソカパ要塞へ、2門をプンタゴルダ要塞へ設置しようと持ち込んだ。しかし、我々が当地へ到着したのは、宣戦布告から約1ヶ月もたっていたのだが、設置を完了していたのは僅か1門のみであった。”(コンカス)

このような状況であったから、セルベラが当地を後に出港するには何の問題もなかったが、機械類の整備点検と相変わらずの石炭問題とで身軽な艦隊行動は取れなかった。

まず、オケンドとビスカヤは2度も大西洋を往復していて、エンジンを連続稼動したために、その運転休止が絶対に必要だった。(この2隻の軍艦は、各々キューバとアメリカの海域で就役していたのを、艦隊編入のためにケープベルデへ呼び戻した)

これに、常時発進体制をとっていたために46時中ボイラーの火をおとすことができず、水の交換ができていなかった。予備を入れずに必要な水の量は600トン。港で水搬入用設備は舢舨のみで、1隻が運べる水の量は6トン、水専用に使えるのは3—4隻で日に2往復しかできない。これだけで12—13日はかかる。

石炭も相変わらずの問題であった。要は、舢舨、タグボート、箆等をはじめとする搬入設備器機がないため、どんなに頑張っても日に150トン以上の石炭を船積みすることはできなかった。艦隊の石炭の消費量を言えば、エンジン点火前でさえ、照明、ウインチ、調理、蒸気ランチ等のために、日に4—5トンは使ってしまう。だから、緊急の課題は、いかにして早期に艦船の設備整備を整えて、出動体制をとることができるかにかかっていた。そうすれば、多少の犠牲を覚悟で敵の封鎖網をかいくぐりハバナ港へでも、あるいは、他の港湾へでも逃げ込めることができる。

さて、セルベラの無傷でのサンチャゴ入港を祝った祝電を、当のセルベラ本人にではなく、遠く離れたマドリッドの植民地大臣R.ヒロンへ打電したキューバ総督のブランコだが、彼

はセルベラの到着2日前の5月17日に、おなじ植民地省大臣へ次のような、一見、恫喝ともとれそうな電報を発していた。もちろん、このようなことをセルベラは知る由もない。

(ハバナ、5月17日、ブランコキューバ総督→R.ヒロン植民地省大臣)

閣下自ら暗号解読をせられたし

「当地海軍司令官に我が艦隊の現況に関してニュースの有無を問い合わせたところ、下記の回答があった。サンファン（プエルトリコ）発の極秘電報によれば、フォール・ド・フランス（マルティニーク）にある艦隊指令長官に指令が送られたが、それが拡大解釈されて、現地で成功裏に作戦遂行の目処が立たない場合には、艦隊の本国帰還も可なりとのことになった由、回答あった。

もし、かかる事態が起こるならば、当地の情勢は到底支え切れないものとなり、小職はこの首都で、そして、全島での血塗られた革命を阻止することはできない。さらに言えば、一般市民の感情は、艦隊の到着が遅延していることで、既に異常に気を昂らせているのである。よって、願わくは、閣下から下記事項の有無についてご連絡をたまわりたい。

- 1 艦隊に帰還命令が出された由であるが、その真偽。
- 2 もし、そうであるならば、そのような政府の決定は我が国の歴史を血塗られたページで汚すことになり、引いては、キューバ全体と祖国スペインの名誉を失うこととなることを承知の上のことなのであろうか？

もし、我が艦隊が敗北したのなら、当地では敵を葬るか、さもなくんば、死を決意することになる。しかし、艦隊が逃げ去ることになるならば、当地はパニックとなり、革命の渦に巻き込まれることは確実である。」

同様な艦隊待望論は5月18日付けでプエルトリコの総督からも植民地大臣あてに発電される。

さてしかし、ブランコ総督は、セルベラ艦隊が4隻の戦艦と2隻の駆逐艦という小編成で、しかも、ないないづくしで尾羽うち枯らしての入港と知ると、手の裏を返すような電報をマドリッドの今度は陸軍大臣へ打電する。当然、セルベラはこの電報を知る由もない。知るのにはマドリッド帰還後のこととなる。

(ハバナ、5月20日、ブランコ総督→コルレラ陸軍大臣)

「既報のとおりセルベラ艦隊は駆逐艦テロールを除きサンチャゴへ到着した。テロールはアリカンテとともにマルティニークに残留したが封鎖されている。艦隊に糧食、石炭ともになく、サンチャゴで石炭を積み込み中。しかし、ここに長逗留はできない。封鎖され他の艦船と分断される危険がある。停泊に適地少ない。

軍艦ペラージョ、カルロスV、魚雷艇の小艦隊等が共に来たりなば、同じ行動をとって、キューバ防衛に与って力あらん。しかしながら、艦船の数を減じて来航しており、敵船との戦闘を避け危険に曝されることを避けておるので、大きな成果は期待できない。大きな力となるはずの石炭、糧食、武器弾薬もなし。」

艦隊の勝敗は問題ではない、艦隊が来なければ、あるいは、途中で引き返すようなことがあったならば、キューバは叛徒の手に陥るか、あるいは、いっそ革命が起こって全島が血

塗られることとなりスペインの恥辱が歴史に刻まれることとなるだろうと、なかば恫喝にも似た電報を打った3日の後には、手の裏を返すように、今度は艦隊は早々にサンチャゴを出て行くべきだと言っている。あるいは、とりようによっては、艦隊が敵の手に陥ちるとしても、それは自分の責任ではないと、早々に手を打っているようにも見受けられる。

総督はセルベラのサンチャゴ到着（5月19日）以降同月25日まで、彼を横目で見ながら、マドリッドへ、あるいは、在キューバの陸海軍の司令官等へは12通もの電報で現況報告、敵艦隊情報、作戦に関する考え方等を頻繁に連絡する。その間、3回にわたって、リナーレス陸軍サンチャゴ師団長を経由してセルベラ宛にご下問があるが、直接総督自らセルベラへは連絡しない。あたかも何か含むところがあるかのようである。総督自らがセルベラへ連絡するのは6月26日になってからである。

海戦前後になされた2人の間の書簡をつぶさに見ると、ブランコ閣下はもとは陸軍軍人ながら、政治感覚に富んだなかなかの大官であったことが読み取れる。その大官が、艦隊の作戦、運営にまでくちばしを入れてくるのは、この後もう直ぐである。

セルベラは、仲間うちの儀礼は守って、ベルメッホの後の新任海軍大臣アウニオンへ祝電を打つ。

（サンチャゴ，5月21日，セルベラ→アウニオン海軍大臣）

「海軍大臣へのご昇格おめでとうございます。大きな成果を期待します。当サンチャゴ・デ・キューバは物資少なく、支援なくんば敵に膝を屈せざるを得なくなるでしょう。当艦隊は敵艦隊に劣り思いきった戦闘は受けて立てません。もし戦わば、必敗であり、またもし石炭積み込み前に海上封鎖をされれば、我々は市とともに降伏せざるを得ないでしょう。もし糧食を受け取ればそれが尽きるまでの抵抗戦は可能であります。」

祝電ではあるが、現地の実態は伝えなければならない。そして、事態はセルベラの見解どおりに推移して行く。5月21日、英国船籍の石炭船が石炭を積んでクラサオからサンチャゴへ向かったという情報が〔ブランコ総督→陸軍サンチャゴ師団長アルセニオ・リナーレス→セルベラ〕というルートで流されて来る。この石炭情報は、石炭5,000トンクラサオへ送るべく手配したとの4月26日付けの政府連絡もあったので、セルベラは信用したようだ。現に、5月22日のアウニオン新長官あての報告に、「エンジン、ボイラーの整備に余念無し。石炭は集荷してはいるが、未だ貯蔵庫を充たすには至っていない。クラサオからの石炭船が着けば、貯蔵庫を充たし残余を残すこととなろう。」といている。しかし、この石炭船リストメル号は5月25日サンチャゴ港入口近くで米海軍に拿捕される。このため、セルベラ側は、自軍に関する情報が大量に敵に伝わった可能性を前提とした作戦を考えざるを得なくなる。

- 4 5月21日にはハバナ海軍工廠司令官であるマンテローラからセルベラに連絡があって、ハバナは敵艦ニューヨーク、インディアナ、ピューリタンの3隻に、名称不詳の巡洋艦5隻、小砲艦6隻、連絡船2隻に封鎖されており、シエンフエゴスも重畳と囲まれて身動きならぬと言ってくる。つづいてマンテローラは、キューバ海軍の現況を報告する。それによると、55隻からなるスペインキューバ艦隊は、そのうち32隻は有効性少ない補助艦船で、もともと沿岸警備用に造られたもの。残りの艦船のなかで、結局、軍艦として使えるものは3隻と砲艦4隻のみ。他艦は、エンジンやボイラーに問題があったり、搭載する砲が使い物になら

ないという。そして、セルベラがスペインから物資資材を豊富に持ってきてくれるものと期待していたと嘆くことしきりであった。

セルベラ艦隊は石炭の積み込み、物資の補給と補充、艦船各器機の修理と整備、火器の点検等で寧日ないが、情報は頻々として入って、敵は封鎖包囲網でキューバの主たる港湾のほとんどを囲い込む勢いだと言う。

この5月21日にはサンチャゴ沖合に2隻の米艦がその船影を点在させた。同23日にはそれが4隻にふえ、24日には1隻減って3隻が25日、26日と引き続き監視をつづけている。しかも、24日には、サンチャゴと並ぶキューバ南岸の代表的港湾、シエンフエゴス沖合にシュレー提督率いる米移動艦隊が出現する。同25日にはサンチャゴ港の入口手前でクラサオから来た石炭船リストーメルがサンチャゴを監視していた米国艦隊に拿捕されてしまう。26日夕刻にはいよいよサンチャゴ沖にシュレー艦隊がその艦影を次々と現す。

上記の米国艦船の動きは、たとえ断片的にでも、セルベラには当然伝わる。24日、セルベラは、全艦がボイラーに火を入れ抜錨の準備をして、結論次第ではそのまま出航できる体制をとった上で、艦隊会議を召集して当面の対処策を検討した。要は、サンチャゴを今出てプエルトリコへ向かうか、艦隊整備を続行してある程度準備が整った段階で機をみて封鎖を突破してプエルトリコへ向かうか、2つの選択肢のうちどれを選ぶかということになった。その際考えられた重要な要因は、

- 1 艦隊の速度は一番遅いビスカヤの最高速度に規制されて14ノットにしかならない。これでは、敵の追跡を振払うのには遅すぎる。
- 2 現在石炭は必要量の3分の1しか持っていない。
- 3 サンチャゴ港の形状が瓢箪のようになっていて、くびれた水域は狭くて浅く、1船ずつ通過して行かなくてはならず時間がかかる。

以上の阻害要因を承知の上で、果たしてプエルトリコへ、それもただ今直ぐに行くことに、戦略的価値があるかということになった。しかも、プエルトリコで各艦が1,000トンからの石炭を、敵艦が来る前に、24時間ないし36時間以内で積み込むことが不可能なことはこれまでの経験で明白であった。当然、ここは整備と石炭積み込みを続けて、好機を待とうと衆議が一決した。

24日付けで、上記会議で決まった当面の方針を彼はマドリッドのアウニオン大臣へ報告する。アウニオンからは折り返しで了解した旨の返電が来る。しかし、事態はいよいよ切迫してくる。同日付けで、今度はブランコ総督からリナーレス陸軍サンチャゴ師団長経由で、「米国よりの私信に、サンチャゴ停泊中の艦隊を敵は湾へ閉じ込めんと企図ありと。港湾部の入口の監視を強化して、この計画の実行を阻止せなければならない。」と言って来る。

資料を見るかぎり、セルベラの判断と予見は、これまで一度も狂ったことはなかったが、この24日から26日にかけては彼の判断に多少の乱調子が見られる。24日の会議の議事録をアウニオン大臣に送った翌日には、セルベラにしては多少冷静さを欠いた感じの電報をアウニオンへ発電している。

(サンチャゴ, 5月25日, セルベラ→アウニオン)

「我々は封鎖された。我が艦隊が当地へ航行したことは、我が国の国益にとって、壊滅的な災厄となる。自分の主張が正しかったことが、次々と起こる事象で判明している。武力の

圧倒的な差異によって、いかなる作戦も絶対的に遂行不可能となっている。1ヶ月の糧食は保持。』

極めて実証的なセルベラにしては観念的な判断をしたといたら、彼に酷であろうか。米国側の資料によれば、この日サンチャゴ沖を監視遊弋していたアメリカ海軍の艦船は3隻だが、そのうち本格的な軍艦は装甲巡洋艦ミネアポリスだけで、他の2隻セントポールとイエールはいずれもアメリカン定期海運という民間企業から徴用された武装巡洋艦であった。

3隻に関する正確な情報がセルベラに入れば、上記の「我々は封鎖された。」といとも簡単に認めるようなことは言わなかったのではなかろうか。あるいは、この後に起こるであろう事態に備えて自分の立場を擁護できるように、予め危険分散する意図で多少誇張した状況判断を試みさせたのだろうか。同じ25日付けで、彼は陸軍サンチャゴ師団長リナーレスへ艦隊の現況報告をするが、その中で彼は日頃の慨嘆をぶつける。

「……サンチャゴへ来たのは不運としか言いようがなく、ここでは必要物資すべてが欠乏しています。当港は小職自らが選んだものであり、その理由は、封鎖されなければ食料、石炭、その他の物資がよく補給され得るものと考えたからであります。封鎖されているという観念は小職の念頭から離れるものではないのですが、（見方を変えれば）敵艦隊の大きな部分をここに引き付けて奔走させており、そのことが小さく貧弱な軍備しか持たない艦隊ができるもっとも効率的な軍務であると思い、自らを元気づけております。…」

今度は、そのリナーレス師団長を経由して、ブランコ総督からご下問がある。

（5月25日、サンチャゴ陸軍師団長アルセニオ・リナーレス→セルベラ）

「貴信拝受いたしました。ブランコ総督閣下は、貴艦隊が貴官の効率的な指揮下にありながら、抜錨して出航しない理由は奈辺にあるのかご教授ありたいと申されております。小官は貴信の要点を抜き書きして、情報を総督閣下に転送しました。ここにその写しを同封し報告します。』

このリナーレスは後の7月1日の陸戦で重傷を負う。ブランコ総督から直ぐに返事が来る。来るといっても直接セルベラ宛にはない。例によってリナーレス師団長経由となる。

（5月26日、ブランコ総司令官→リナーレスサンチャゴ師団長）

「セルベラ提督に伝えよ：

6 リナーレスを経由して貴信を拝受した。お礼申し上げる。このような重大時に小職が貴職に援助を与えるよう許されていたなら、もっとよい結果が得られたように思う。なぜならば、島の状況と敵艦の日々の位置等に関する情報を貴職に与えるに、小職がもっとも適しているからであり、それが貴職が計画を遂行するにもっとも役立ったであろうと思うからである。……いかなる事態にあっても小職の貴職に対する信頼は揺るがない。貴職の能力と愛国心から来るべきすべてのことに希望をつなごう。……常に小職、および、極めて効率的なりナーレスを信用せられよ。神のご加護を信じよう。……」

発信名が総督ではなく総司令官となっている。陸海を束ねるのは自分だと言いたかったのであろうか。これを読むと、作戦、情報などの類いではない。要するに、もっとこまごまと報告をして指示を仰げと言わんばかりな口吻である。26日は海が荒れた。セルベラは、荒れる海を奇貨として再度艦隊脱出の可否を図るべく会議を召集する。同日付けの「議事録」によれば、今度こそ脱出してプエルトリコへ向かおうと衆議は一決した。しかし、ボイラーが暖まり蒸気を出すまでには時間がかかる。そこで、午後5時までに出航準備を完了させるべく全ボイラーに火を入れるよう指示が出された。

さてしかし、午後2時に手旗信号で敵艦3隻の存在が伝えられた。しかし、この時たまたま天気が回復の兆しを見せていたことで、セルベラは再度会合を召集した。

2回目の会議では1回目の会議の時よりも詳しく、海のうねりが議論された。要はこのうねりでは、艦隊は無事に湾を脱出することは難しかろうということであった。その論拠は、港の入口の狭まった部分の水深が浅く、このうねりでは船が海底をこすって大きな事故につながりかねないというものだった。そこで内海水先案内人と呼んで意見を徴したところ、水深のもっとも浅いモリージョ地点は水深が27.1/2フィートしかなく、一方、コロンの喫水線は24.9フィートもあるから、このうねりを前提とすればコロンはその竜骨を海底にぶつける危険が大きい、だから止めた方がよいという意見だった。

大方の意見が、この時の出航を取り止めて次の好機を狙うというものであったが、艦隊参謀長のブスタメンテとマリアテレサの艦長コンカスはこの日の脱出を主張した。ふたりの意見は、要するに、このまま当港にいつづけければ、封鎖はきつくなろうし、結果として食料資材の不足はますます酷くなって来るのは目に見えている。座して死を待つより脱出して死中に活を求めた方がよいというものであった。

しかし、セルベラの結論は「留まる」であった。もちろん、彼は27日付けでその旨をアウニオンへ報告する。翌28日には折り返しアウニオンから、セルベラの作戦については論評なしに、単に、サンチャゴ湾口に米軍は老朽船を沈没させる意図があるかも知れぬと警告を発する。

この間米国側の資料によれば、シュレー移動艦隊はこの日(26日)の夕刻、サンチャゴ沖に到着。たまたま港湾の入口を監視していたイェール、セントポール、ミネアポリスの3艦は持ち場を離れて艦隊に合体した。この結果、港は同日午後6時から翌27日の午後5時まで米国艦船の監視はまったくない状態であったという。その後セントポールだけが持ち場に戻った。しかも、シュレー提督は、サンチャゴ港内を捜索するでもなく、この時の荒れている海と石炭の積み増しを考えて、キューバ南部およびユカタン海峡を通りキーウエストへ向かう指示を同日(26日)午後7時45分に全艦に発した。

この決定に驚いた米海軍本部と Sampson 提督は、こもごも遠隔の地から連絡をとり、サンチャゴ監視の重要性をシュレーに説いた。結局シュレーがサンチャゴへ戻るのは28日となる。そして29日には湾内にコロンとマリアテレサおよび2隻の魚雷艇駆逐艦を発見することになる。

シュレーのこの時の行動は戦後に海軍諮問委員会にかけられ処断された。したがって、26日の夕刻から27日の午後5時まではサンチャゴの沖合に敵艦はいなかったことになる。コンカスとブスタメンテの主張をセルベラが採用して、この時脱出を敢行していたら、違った戦局があったかも知れない<sup>1</sup>。以上の米海軍の動きはスペイン側にも知られていた。何故か

ブランコはこれを、セルベラにではなく、マドリッドのコレリア陸軍大臣へ報告している。

（ハバナ、5月28日、ブランコ→コレリア）

「リナーレス将軍によると、昨日サンチャゴ沖15マイルに敵艦7隻が到着。1隻を除き西方へ姿を消した。」

元の海域へ戻った1隻はセントポールで米側の記録と一致するが、日付けが米側と1日ずれている。ブランコ総督は妙な電報を送り続ける。

（5月28日、ブランコ総司令官→コレリア陸軍大臣）

「閣下にはサンチャゴ・デ・キューバより直接ニュースを入手せられておられると思いますが、以下の事実を申し述べておくことが適切かと信じます。該地方はハバナから遠隔の地にあること、敵からの攻撃、封鎖、キューバ人反乱軍等を考えて、小職はでき得る限りの食料補給を試みてきました。（さらに）軍事面では4大隊、3つの小艦隊、クルップ製山岳用大砲1門、民間人技術者4人、野砲10門、攻城砲47門、以上を運用する補助部隊等を配置してきました。食料は政府支払の小切手で支払うほか、……」

要するに、自分はちゃんとやっていると言ってるだけの電報である。ブランコはセルベラへ送るべき情報をマドリッドの陸軍大臣へ打電し続ける。

（5月29日、ブランコ→コレリア陸軍大臣）

「交換した捕虜からの報告によれば、セルベラ艦隊のキューバへの到来は大きな話題となっているとのことであります。米国とその提督たちは能力の欠如という罪にさいなまれているとの由。昨日サンチャゴ沖に12隻の艦船。今朝はその大半は西方へ消えました。」

5月31日はシュレー艦隊が、探りを入れるように、湾内の艦船と砲台へ砲撃を加えてきた。セルベラ艦隊にとってはカリブ海での最初の交戦であった。6月3日にはアメリカは商船メリマック号を湾の入口に沈没させて水路を狭めることに成功する。セルベラ艦隊の実質封じ込めが始まる。

これより日を追って敵からの砲撃は激しさを増していく。それに呼応して陸からの攻撃が予測される。6月に入ると制海権を握った米国は大挙して陸軍を陸揚げしサンチャゴの総攻撃を画す。セルベラはこの6月3日の戦闘報告をアウニオン海軍大臣へ報告しているが、すこし要点がボケているのが気になる。

8 （サンチャゴ、6月3日、セルベラ→アウニオン）

「本日早朝、敵艦1隻と商業貨物船1隻が港の入口へ押し入ろうとして、当方の駆逐艦と偵察艇が発砲。これに呼応してレイナメルセデス号およびテロール号の大砲を据え付けたソカバ砲台が発射。敵商船は沈没。敵艦は応射。敵の大尉1名と水夫6名を拿捕。敵砲による被害はなし。駆逐艦の2.59インチ砲に軽度の損傷。」

この戦闘に関する報告は上記のものしかない。セルベラは淡々と書いているが、意図して

こう書いたのか、あるいは、米軍側の意図を読み切れなかったからなのか、興味深い。と言うのは、サンチャゴ港内に、それも水路の狭く浅いところに、何とかして艦船を沈没させて、セルベラ艦隊を閉じ込めてしまおうというのが、この日のサンプソン（あるいはシュレー）側の作戦であり、それは見事に実行されたのであった。

上記の電報報告では、セルベラは敵の意図を読みとった様子も見えず、よって、当然にそれに関するコメントもない。彼が、3日の戦闘での敵の意図にやっと気がつくのは6日になってからである。

（サンチャゴ，6月6日，セルベラ→アウニオン）

「敵は湾口の工作に成功した模様。圧倒的に優勢な敵の工作を防ぎきれなかった。指示を乞う。」

26日の会議での、脱出しないという彼の判断、今回の戦闘結果の評価、いずれもセルベラにしては、的を外している。どうしたことであろうか。指示を乞うと言われても、この期に及んでそんなことを言われても、もともと明白な戦略に欠けるマドリッドである。要はよきに計らえと言って来る。

（マドリッド，6月8日，アウニオン海軍大臣→セルベラ司令長官）

「貴地で生起するあらゆるケースを当地で予見し、これに適切な解決策を見出すことは不可能であります。政府は貴官の裁量にある手の内の数々、高い資質、広く大きな展望等を知悉しており、貴官がいかなる事態に遭遇しても、それらを駆使して最良の解決策を採るものと確信しております。

そして、貴官が、我が海軍の軍規に示す文字と精神に則って行動されるならば、貴官はその困難な使命を全うされたものと考えられます。」

[海軍軍務規定第3部第1章153条]

一イカニ優越セル敵トイエドモ、力ノカギリ闘ワナケレバナラナイ。ソレハ、降伏ノ要アリト認メラルル場合ニオイテサエモ、貴官ノ防衛ガ敵ニ敬意ヲ払ワセルホドノモデナケレバナラナイ。

モシ可能ニシテ、海難ニヨリタダチニ乗員ノ生命ヲ失ウ危険アラザレバ、降伏センヨリハ敵地ノ沿岸ニ貴艦ヲ座礁セシムベシ。又、座礁ノ後トイエドモ、艦ヲ守リ、ツイニハ、敵カラ艦ヲ護ル手段ナキトキハ、火ヲカケテコレヲ燃ヤスベシ

アウニオンにしても軍規を守れと言っている分には、後々厄介なことには絶対ならない。後の7月3日、サンプソン艦隊によってサンチャゴ湾に雪隠詰に遭ったセルベラは、命を賭してこの軍規を遵守することになる。

さて、サンチャゴ湾での攻守に大きな分岐点となる、この6月3日にはセルベラの知らぬところで、何とも奇妙な電報がコレア陸軍大臣とブランコ総督の間で交わされていた。戦後この交信がニューヨーク・ジャーナルに掲載され、世界中の失笑を買うこととなる<sup>2</sup>。

（マドリッド6月3日，コレア陸軍大臣→ブランコ総督）

「フィリピンにおける由々しき事態により、該地へ艦船と軍の補強部隊を至急送らねばならぬこととなった。マニラの敵艦隊と対峙せんには、同等に強力な艦隊を送らねばならない。現状当地には2隻の軍艦しかなく、うち1隻は運河（スエズ）を通過できないものと思われる。できることのすべては、セルベラ艦隊をサンチャゴから出して彼の地へ向けることである。しかし、これを決断する前に、政府は、セルベラ艦隊のキューバからの引き上げが、貴地にとりいかなるものとなるか、貴官の所見を伺いたい。この措置は暫定的なものであり、フィリピンで所期の目的を達した後には、遅滞なく、かつ、戦闘能力を強化してキューバへ返す所存である。」

長期的な戦略はもちろんのこと、目先の事実がどうなっているかなどとは、何のかかわりもない、作戦本部のこのおどかさば、先にも記したように、戦後ニューヨークジャーナルに掲載され、世界的に評判となる。ブランコ総督は嚇怒してこれに答える。

（ハバナ、6月4日、ブランコ総督→コルレア陸軍大臣）

「この時期にセルベラ艦隊がキューバを離れるならば、当地の世論に致命的な影響を与えるであろうし、そのことを閣下に伏せておくことは、小職の著しい職務怠慢ということになると思料する。

艦隊の出発がもたらす結果について、それは統治不能の事態を招来することである。セルベラ艦隊が多岐にわたり不足している事実は義勇兵らは既に充分に承知しており、第2の艦隊がいつ到来するかと絶えず待っているのが実態である。

艦隊の補充補強ではなく、それでなくとも少ない艦船を引き上げようとしていることが知れわたれば、暴動に類する騒ぎが起こらないとも限らず、特に、その場合、陸軍の態度が疑わしく、この島を失えば、ここから大暴動の火の手が挙がることとなろう。」

ブランコ総督は5月25日付け電報（前出）で、リナーレス師団長を経由してセルベラに「何故貴艦隊は抜錨してサンチャゴを出航せぬのか？」と内々に質問して底意地の悪いところを見せている。その同じ総督からこの言葉である。これではセルベラは、留まっていいいのか、出航しなければいけないのか、わからなくなってしまう。

事態が緊急の度を高めれば高めるほど、ブランコは対応能力の欠如を露呈する。戦場における上層部の失策（というよりも遅疑逡巡と意思つき）は現場の死を意味する。ブランコはこの後すぐに、そして今度はおおびらに、「艦隊は出航（あるいは脱出）せよ」と居丈高に指示してくる。

6月8日セルベラは再び艦隊幹部を集めて脱出作戦の可否を問うた。サンチャゴで3回目の会議となる。この時も艦隊参謀長のブスタメンテとマリアテレサ艦長のコンカスが脱出を主張し、セルベラと他の幹部らは前回の会議の時よりも条件が一層悪くなっており、脱出に合理的理由が見出せないとして反対した。

ブスタメンテの考えは以下のものであった。敵の圧倒的な優勢は間違いのないところだが、その優勢であるが故の取りこぼしが必ずある。だから、脱出して即全滅ということにはならない。この時の無月の闇を利して脱出を敢行すべきで、充分休養を取りながら、好機到来したならすぐに行動をとれるように、ボイラーの火は絶えず落とさぬように焚いておく。脱出はサンチャゴ湾の形状を考えて1艦は西へ、1艦は東へという風にばらばらに突出をしてプ

エルトリコのサンファンを目指す。あるいは、一団となって湾を出る場合にはハバナ港を目指すというものであった。

コンカスの主張は、この無月の夜を利用することと、敵封鎖網に高速船ブルックリンとニューヨークのうち一つでも欠けた場合を条件として、脱出を敢行する。とくに敵の包囲の中核が沖合い5～6マイルと近くなっているから、一団となつての脱出が肝要であるとした。ブスタメンテとコンカスはいずれも大局観においてセルベラのそれと同一なのだが、要は死中に活を求めんとしたものであった。

しかし、今回もセルベラは2人の意見を採らなかった。

その論旨は、敵包囲網の先端が湾口から1マイルにも満たないところまできている。にもかかわらず、湾口部を見下ろす丘に点在する要塞の守備砲は貧弱で、脱出の際の掩護たり得ない。そのうえ6月3日の戦闘で敵が意図的に沈没させたメリマックが水路を厄しているため、脱出は1艦づつ港を出なければならず時間を要する。このことは敵に攻撃を許す時間的余裕を与えることとなる。以上の条件が続く限り脱出は行わない。徒に兵を殺すだけになる。だから、専守防衛に徹底して敵の過半をここに引き付けておくというものであった。

11日にはリナーレス師団長が各砲台に艦隊から貸与していた6.3インチ口径オントリア砲の使用許可をセルベラに求めてくる。12日、今度は艦隊の陸戦隊の支援を要求してくる。いずれもセルベラは快諾する。14日と16日、湾口部とその周辺にある砲台への敵船からの艦砲射撃が繰り返され、陸上での大攻勢を予想させる。

ところで、セルベラの知らぬところで、ブランコ総督はコルレア陸軍大臣へ、島内での陸海両軍の統合指揮権を自分に与えるよう申請をしていた。

(ハバナ、6月20日、ブランコ総督→コルレア陸軍大臣)

「その結果が小職の気持ちに重くのしかかっているところでありますが、セルベラ提督が現在享受されてをるところの、ある種の「自由」が、彼の作戦遂行を手助けせんとする小職の意図を阻害していることはまことに残念であります。

ところで、サンチャゴ港へセルベラ艦隊が入港して引続き停泊しているために、当島における戦争の遂行方法、糧食と石炭の備蓄、どの地点に重点的に物資の配給をするか、等々の問題がその様相を一変してしまつたのであります。もし、最初の段階から、小職ならびにリナーレス將軍に、一度たりとも提督から何なりとお申し越しがあつたならば、多分、我々の間でよりよい解決策を見出し出していたかもしれないのであります。

現に艦隊を待ち構えているものは、勢力で差のある両軍の港内での戦闘結果を座して待つか、封鎖ラインを突破して、ハイチ、ジャマイカ等の他の港湾へ脱出せんか、二つに一つなのであります。もっとも突破の場合には、移動した先でまた封鎖をされるだろうと思われるが、要は、予想されることはこのような悪いことばかりなのであります。

艦隊はシエンフエゴスかハバナへ向かうのがよいと考えます。今ならそれが可能であります。11  
またもし、それを可としないのなら、艦隊の強化を図りスペインへ帰還するもよい。いかなる策でも、サンチャゴに封鎖されて、飢えから降伏を余儀なくされるよりは上策と考えます。

事態はことほど左様に深刻であり、この危急存亡の時にあたって、必ずや政府は、我が国益と軍の名誉にとって最善と思われる策を命じられるものと確信します。

以上の理由により、陸海の軍事行動を統合して一人の指揮官の指揮下に集約することの利

点を敢えて提案いたします。願わくは、小戦に陸上ならびに当該水域に割り当てられた海軍の統合指揮権を与えられんことを。」

まるでセルベラがいなければキューバへの米海軍の攻撃も減じようとも言いたげなもの言い様である。22日には米国陸軍がバラコア岬（サンチャゴの東82.3マイル）へ上陸。23日には米軍はダイキリ（サンチャゴの東隣の港湾）を確保。ひたひたと東からサンチャゴへ近付いてきている。陸戦の結末でサンチャゴの降伏は決まる。この日、セルベラは、リナーレスの依頼にもとづき、かねてからのセルベラ、ブランコ、リナーレス3者間での打ち合わせに従って、艦隊参謀長ブスタメンテの指揮に1,000名の陸戦隊をつけて応援にやらせる。

（サンチャゴ，6月23日，セルベラ→アウニオン）

「昨日敵軍はダイキリ（サンチャゴの西30キロの海岸）を確保。本日はシボニー（サンチャゴとダイキリの中間に位置する海浜）を確保か。事態は、予期しなかったわけではないが、苦渋に満ちたものである。陸軍支援のため艦隊の兵員を上陸させた。……しかし、市を崩壊の危機から救えるかどうか、小戦は懐疑的。この状況下での艦隊の脱出は絶対に不可能。できる限り長期間抵抗を続け、最後に艦船を破壊する所存。小戦の反対にもかかわらず、艦隊をこのような苦境に陥れた責任は他の人々にあるが、手枷足枷をされた役者を演ずるのは大変な苦痛。」

アウニオンは海軍ではセルベラの後輩であることも手伝ってか、この期に及んで何の遠慮が要ろうかとばかりに、かれのもの言いは遠慮会釈もない。

翌24日、セルベラは艦隊幹部を召集して、上記アウニオン宛ての電報を披露して、ふたたび脱出行の可否を話合う。今回、ブスタメンテは上陸してリナーレスの陸戦に応援に行っていて留守だった。

そして今回は誰も脱出を主張しなかった。全員がセルベラの考えに賛同した。そして最後には海軍軍規の命じるところに従うということになった。この日、コルレア陸軍大臣宛に20日付けで申請しておいた陸海軍の統合指揮権が、ブランコ総督に認可付与される。

（マドリッド，コルレア陸軍大臣→ブランコ総督兼総司令官）

「政府との合意で海軍大臣はセルベラ提督に下記の通り通知する。—セルベラ提督旗下の艦隊は特定の目的地を持たず、今後はキューバ島の防衛に協力する。この場合、ブランコ閣下の指揮下にある領土内での他の海軍の作戦行動と同様に、貴艦隊にはブランコ閣下の権能が及ぶこととなる。

12 以上の権能は1872年10月29日付け国王布告によって確認された陸海軍布告令によってブランコ閣下に付与されたものである。—」

アウニオンからセルベラに、彼がブランコ総督の指揮下に入った旨の通達が送られてくる。セルベラがこれを知るのには、資料の前後の脈絡からして、同日行われた艦隊作戦会議の後と思われる。翌日、ただちにセルベラは委細承知したと返電する。それも半分本気、半分嫌味の内容である。事ここに至って何の遠慮があろうかといった様子が窺える。

(サンチャゴ, 6月25日, セルベラ→アウニオン)

「……小官は常時総司令官（総督）閣下の指揮下にあるものと認識しておるが、既に確立している両者間の関係につき法的効力を付与するご指示を感謝する。また、共同作戦をとることによって、最重要な諸施策を執行する責任から小官を離脱していただき、心からお礼申し上げます。」

セルベラは同日付けでブランコ総司令官（総督）にも、自分がブランコの指揮下に入るようマドリッドから通達があった旨を報告する。そして、「6月23日付け連絡にて小官は政府宛に以下の考えを打電したことを閣下に申し上げることは、小官の責務と考え……」と言って、アウニオン宛に書いた主旨—艦隊は脱出をせず、市の防衛をして、最後は船を焼く—を繰り返し主張した。

ブランコ総司令官（この場合は総督の呼称は使っていない）から返答が来る。それも、セルベラ本人宛ではなく、例によってリナーレス師団長経由である。

(6月25日, 陸軍サンチャゴ師団長アルセニオ・リナーレス→セルベラ提督)

「昨夜ブランコ総司令官閣下より電報がありました。その中で他の事に紛らせて以下のことを申されました。

『貴君がセルベラ提督に申し上げて欲しい。それは、小職が彼の意見と計画を知りたいということである。小職の考えは、彼セルベラは、彼が最適と考える時にいつでも、サンチャゴから出撃して行くべきであるということである。なぜならば、そこサンチャゴでは、事態は極めて危険なものとなっているからである。昨夜はサンチャゴには7隻の軍艦しかなく、シエンフエゴスに3隻、ハバナに9隻という状況であったが、サント・ドミンゴとモンテヴィデオの2隻は敵の封鎖を難無くすり抜けた。もし戦うことなく貴艦隊を失えば、それがスペインの内外に与える道義上の影響は恐らく極めて大きなものとなるだろう。』

最初、ブランコ総督は、スペイン本国から艦隊が来なければ、キューバは叛徒と裏切り人とパニックになった人々で收拾がつかなくなると言って、艦隊派遣方をマドリッドの関係各筋へ矢のように催促した。いざ到来したセルベラ艦隊が、小規模で貧弱な装備と乏しい資材に悩んでいるのを見ると、手の裏を返すように今度は一刻も早く島から出て行けという。なまじ艦隊などがいると、米海軍の注意を引き付けて一層の紛争の種になるからだと言う。そして、敵の封鎖が十重二十重となって出るに連れられぬ状況になると、今度は意を決して出撃し桜の花のようにきれいに散れと言い出した。これでは死ぬ方はたまったものではない。

ブランコは何故こうも豹変したのか。トラスクによると、この時期（6月22日）マドリッドの国会で対米軍事作戦の失敗が取り上げられ、宰相サガスタが左右両派から激しく非難されたという。

その際、海軍大臣アウニオンは答弁に立って、「それが国民にとって良い結果を及ぼすならば、粒々辛苦の末に艦隊が滅亡したとしても、致し方ないと考えられるのであります。」と言ったという<sup>3</sup>。政治人間ブランコ総督は、これを知るに及んで、艦隊強行出撃説（実際は脱出）を唱え始めたのではないかという。

6月25日付け、リナーレス將軍経由の、ブランコからの問責にセルベラは折り返しで書状を送り、年来の主張を繰り返し述べる。

もともと艦船の絶対数で圧倒的に少ないスペインは、それだけでなく、貧弱な装備、欠陥を補修し切れないで放置したままの火器類、非効率で絶えず物資不足に悩む兵站等を考えれば、アメリカに立ち向かうなどは、螻蛄の斧を振り回すようなもので、徒に犠牲者をふやすものだとする。

「……小官は何の野心もなく、気狂いじみた情熱もない一人の人間として、最も有利な策であるならば、それが何であれ採るといことであり、もっとも声を大にして申し上げたいことは、もし艦隊が大挙して港からの脱出を図れば、その唯一の結果は恐ろしく、かつ、無益な大殺戮でありましょう。そして、その脱出を命ずる者の一人には決してなるまいということであります。

なぜならば、小官が責任を負わねばならぬことは、神、ならびに、無益なもののために命を捧げた人々の歴史に対してであって、祖国の真の防衛に対してではないのであります。しかし小官に関する限り、今日より道徳的観点に立った判断を要しなくなりました。そう申し上げる所以のものは、小官は戦争の作戦に関してすべて総司令官閣下の命に服すよう政府の通達を今受領したからであります。

よって、小官が自らの死を賭してスペインの子ら2,000を率いて港からの脱出をすべきか否かを決めるのは、総司令官閣下であります。これで閣下のご下問に十全にお答えしたと信じます。閣下は本状の中に46年間能力の限りを尽くして祖国に仕えた名誉を重んずる年老いた男の意見の真実で忠誠なる吐露を見られたと信じるのであります。」

上記の書簡はリナーレス將軍経由であった。之では足りぬと思ったのだろうか、セルベラは追いかけて、今度はブランコ総司令官宛てに直接出状する。

（6月25日、セルベラ艦隊司令長官→ブランコ総司令官閣下）

「……敵艦隊を遠方に押し止めておくための沿岸砲台がないために、敵は絶えず港湾入口に留まり、そこを照明で照らしており、一度にひとかたまりになっての脱出以外は不可能であります。しかし、小官の考えでは、脱出は艦隊に必ずや損失を与えるでしょうし、乗組員の大半を失うであります。

閣下がそれを実行せよと命令されるなら、小官はそれに従うのみであります。艦隊の滅失は、小官の判断では、当地へ来るよう命令が発せられた時に決まったのであります。この犠牲に向けて、無意味な命令とは信じますが、命令できるのは閣下なのであります。」

翌26日、今度はブランコ総督から直々にセルベラに書簡が来る。5月19日のサンチャゴ港入港以来初めてのブランコからの書簡であった。

14 （ハバナ、6月26日、ブランコ総司令官→セルベラ提督）

「貴職が小職の揮下に入られることに満足の意を評されていることに感謝する。そのことを小職は名誉に思い、貴職が小職を上司としてではなく、同僚として考えてくれるものと信ずる。

小職には貴職が脱出の困難をことさらに誇張しておられるように思える。これは戦闘の問題ではなく、不運にして貴艦隊が閉じ込められている牢獄からの脱出である。小職はそれを不可能とは考えてはいない。夜陰や悪天候に乗じて敵の監視をかいぐり、どの方向でもよ

い、貴職が最良と判断する方向へ通れるのである。

よし発見されても夜間の砲撃は不正確で、たとえ乗員に負傷が生じても艦船の安全には比較すべくもないことなのである。サンチャゴ市の敗北は必至であると貴職は言うが、その場合、貴職は艦船を破壊するであろう。しかし、陸軍は戦って名誉ある敗北を選ぶのである。その場合にも安全であるチャンスはあり得るのであり、これが貴職に脱出を企ててもらいたいもう一つの理由なのである。」

こう言ってブランコは、これまでの封鎖破りの実績を羅列して、好機を捕らえられれば、いかに強大な敵といえども、またよし発見されたとしても、甚大な損害を蒙るとはとても思えないと言う。そして遂には、スペインの大義のために、贖罪のヤギとなれと恫喝にも似た凄みを利かす<sup>4</sup>。

「……もし艦隊がサンチャゴ港で何らかの方法で敵に拘束されでもしたなら、それが世界に与える影響は甚大なものがあり、今回の戦争は敵方に有利に終結したものと看做されよう。貴職も夙に了知されているようが、世界の目は貴艦隊の帰趨に注がれており、我が国の名誉もまた貴艦隊に依っているのである。政府の見解もまた小職のそれと同一であって、ジレンマの解決には（脱出しかないということに）疑いの余地なく、自分は脱出の成功に自信をもっている。

どのルートを選ぶか、船足の遅いどの船を残すか、等に関してはすべて天与の才に恵まれた貴職の裁量にお任せする。好都合なことに、独巡洋艦ガイエル艦長が脱出は大きなリスクなしに実行できようと明言していることを貴職にお伝えする。」

この書翰からは、ブランコに合理的な思考にもとづく戦略は見当たらない。見えるのは、なんのためらいもなく艦隊を政治の具として弄ぶ思いつきと対応能力の欠如だけで、それが丸出しになっている。マドリッドがダメならその出先の長もダメということであろうか。

この日マドリッドから、ブランコの主張を追認するような政府訓令が飛び込んで来る。それは、23日付けでセルベラがアウニオンへ打電した作戦－「状況は絶望的で艦隊が一旦港外へ出れば全滅は避け難い。故に港内に留まり陸軍と歩調を併せて市の防衛に挺身し、いずれは市は陥落しようから、その時には艦隊を自らの手で破壊して終わる」というもの－に関する政府見解であって、

「……自らの手で破壊する前に、夜間の脱出で、できれば全部あるいは一部なりとも救う手立てを講ずるべきであるというのが政府の見解であります。この考えは、5月26日ならびに6月10日（6月8日の間違いか？）の貴艦隊における会議においても、政府と同じ意見の者がおるのであります。……」

こう言って、プスタメンテとコンカスの脱出敢行説を是としている。アウニオン海軍大臣は続けて、艦隊から陸軍への応援部隊の派遣について、それが陸軍の正規の依頼にもとづくものか否か、支援行動後部隊は艦隊へ帰ったのか否かを問い合わせる。

そして最後に、セルベラがブランコ総司令官の旗下に編入された旨の通達への復命（6月25日付け）に、重要な施策を決定する責任を免除してくれて有り難いと、多少皮肉っぽく書いたことに言及して、

「……（貴官をブランコ総司令官の旗下に配したことに對して）感謝されておられますが、

個人的な配慮によるものではなく、国家に対する軍務の遂行を考える上で最良のものであるからであります。」と切り口上に結論付けて、最後に凄みを利かせる。

「貴官にとって不利な解釈を許すような言辞を避けられよ。」

（サンチャゴ，6月27日，セルベラ→アウニョン）でセルベラは上記電報に対して返信する。自分の意見で政府に不快の念を起こさせたことは遺憾に思うが，1）米国は水路を閉鎖する意図で，港湾のくびれて狭い部分に意図的に艦船を沈没させて水路を浅くしており，夜間の脱出は昼のそれよりも危険が伴うこと，2）陸戦隊の陸軍への派遣は総司令官を通したものであること，3）防戦にいとまない陸軍は応援部隊到着前に陸戦隊を艦隊へ返すことはできないだろうと考えていること等を伝える。

しかし最後には，アウニョンがどう言おうと，自分がブランコの旗下に入ったことは，「……それにもかかわらず，小官の利益に適うものであります。と申すわけは，現在計画されている無意味な殺戮を決定するのは自分ではないということであります。」とあくまで持論を通してしまう。死を眼前にして覚悟を決めたセルベラには，もう怖いものはなかったようである。

しかし，これ以上異を唱えることは軍法会議ものとなってしまう。それは本意ではない。海軍大臣もブランコ総司令官も共に，艦隊は脱出をせよと命令している。軍人として命令に背くことはできない。（6月27日，セルベラ→ブランコ総司令官）で，改めてセルベラはブランコの命令を遂行する旨を伝える。

自分はこれまでに十分に自分の考えを閣下に伝えたから，自今は何も申さぬ。ただ命令を遂行する覚悟でいる。ブランコの考えは，艦隊はサンチャゴから出て行くべきであるというのであれば出て行きましょう。その代わりにブランコの指示で陸軍へ応援にいつている艦隊の陸戦隊1,000名を即時返してもらいたい。そうしなければ艦船は動かせない。そう言って最後に「脱出」の明確な命令を出してくれと要求する。

「……ブランコ総司令官におかれましては，願わくは『脱出』のご命令を確認されていたきたいのであります。いかんとなれば，それが明示されておらず，小官が閣下のご命令を正しく理解していなければ，それは遺憾なことであるからであります。」

ブランコがいくら陸海を統べる大官だといっても，命令がなければ動きようがないとセルベラは言っている。折り返してブランコから詰問が来る。

「貴艦隊に関する貴職の意見，それが脱出の可否，ならびに貴職にとっての最善の策とは何か。以上を遠慮なく申し出られたい」

16

セルベラにすれば，今さら「貴職の意見」でもなかろう。それは今までにも口を酸っぱくして言っているのではないか。翌28日，セルベラはブランコの問いにはまともに対応せずに，陸軍へ派遣している艦隊の陸戦隊にブランコの注意を向けさせる。

「リナーレス将軍によりますれば，我が陸戦隊は，同将軍への援軍がマンサニーヨから到着するまでは，再乗船はできぬとの由であります。」

これを受けたブランコから初めて艦隊に対する要望が明示される。これが何故か「個人、親展扱い」となってくる。

(6月28日、私信、親展扱い、ブランコ総司令官→セルベラ提督)

「……貴職にその遂行を望む小職の計画は以下の通りである。

艦隊は、急がずに、港内に残り、食料が残っているという前提で、貴職がベストと判断する方向へ脱出をすべく好機を窺う。しかし、事態の悪化が急で、サンチャゴ・デ・キューバ市の陥落が間近かと思われる状況では、艦隊は、貴職とその卓越せる司令官らの存在と高い能力に、自らの運命を委ねて、直ちに脱出しなければならない。かくして貴職ら司令官らは、日頃から享受せる自らの名声を確認できるであろう」

29日にセルベラは返信する。

(6月29日、セルベラ→ブランコ閣下)

「貴信拝受。後半の『事態の悪化が急で』がよく理解できないので、繰り返しご指示を乞う。石炭の供給が乏しいので、残余のご指示は、可能な限りこれを遂行いたします。艦船のスチームを立ち上げるには12時間を要し、熱を保ちつつ好機を狙うと1日15トンの石炭を要します。

しかし、小官は閣下の命令するところを理解します。それは、好機到来せば機を逸せずに行動すること。しからずんば、最後の時には、艦隊の損失が確実といえども、港を脱出すること。しかし、港の入口を敵が厄していることで、新たな困難が出来ることも予想されません。』

出る出ると言っても、この小さな艦隊でも、常時出動体制を取ろうとすれば、日に15トンの石炭が要る。しかも、その立ち上げに12時間もかかると言う。

「ブランコ閣下は、そのような海軍の細部の事情をご存じなのだろうか」とでも言いたげなニュアンスである。ブランコ閣下はこれを読んで少し逡巡したのであろうか。何とも言い訳じみた返電が来る。

(6月30日、ブランコ→セルベラ)

「……28日付け書簡は貴職の情報のために出したのだが、この指示が『政府の承認』と齟齬を来さぬか否か、貴職の見解をいただきたい。」

セルベラにすれば、「今さら何を言うのか」といった気持ちなのであろう。彼は返す刀で陸軍のリナーレスへ、多少切り口上な依頼を打電する。リナーレスはこの時は昇格して陸軍中將サンチャゴ第5軍団総司令官となっていた。

17

(セルベラ→リナーレス陸軍中將サンチャゴ第5軍団総司令官)

「[(6月28日付け私信、親展扱いのブランコ書簡)を紹介して]ブランコ閣下より上記の通りのご指示をたまわりましたことを通知いたします。よって、指示の中で言及されておられる『不運な事態』(サンチャゴの陥落)が生起する場合には、いつでも、時を移さず、そ

の旨を小官まで通知ねがいたい。その際には、ブランコ閣下のご指示に沿って、すでに上陸している艦隊の陸戦隊を再乗船させ、艦隊は公海へ押し出ることができるからであります。』

セルベラ態度を見て、ブランコは抜かりなく関係筋へ手を回したのであろうか。直ぐにマドリッドからブランコ総督の指示に対して追認が来る。

（7月1日、マドリッド、アウニオン海軍大臣→モンテローラハバナ海軍工廠長官）

「ブランコ総司令官閣下に伝えられよ。『政府は、ブランコ閣下がセルベラ提督宛に出された指示を承認する』と。」

上記電文を、当時のセルベラが知っていたか否かは詳らかではない。この7月1日にはリナーレス陸軍中將からセルベラ宛に書簡が来る。前日セルベラが、ブランコからあった指示を伝え、サンチャゴが危急存亡の時にはすぐに報せて欲しいとする依頼に対する回答であった。

（7月1日、リナーレス→セルベラ）

「……貴官は、市が敵の手中に陥る危険が差し迫った場合には、それを報せよのご依頼ではありますが、そのことに関して小官は名誉にかけて以下の通り申し述べます。

サンチャゴ市は四方に開いた市街であり、その防衛のために、高地ならびに電線沿いに構築された塹壕等への土塁構築作業に忙殺されて、貴官にその問題の時期を通知するのは不可能であります。なぜならば、ひとたび攻撃が開始されるや、敵の縦型の陣形は、我が方が、寡少な兵員のために、疎らな布陣を余儀なくされている外郭線を突破するだろうからであります。……さらに、戦闘が不利に展開している時に、貴艦隊の援軍を艦隊に撤収することは時宜を得たものとは考えられません。」

これを讀んだセルベラは直ぐに上記リナーレスの見解をブランコ宛に転送する。あたかも、「ブランコ閣下のご指示ご命令は、どうすれば遂行できるのでしょうか」と揶揄するかのように。ここにも「肚の座った」セルベラの素顔が垣間見える。

（7月1日、セルベラ→ブランコ総司令官）

「…閣下にご報告申し上げます。リナーレス將軍のご回答は、市は四方に開かれた街区をなしており、ひたすら土塁と電線の囲い込み作業に忙殺され、『重大なる時期』をいつ小官へ伝えるべきか決定できないとのことであります。……艦隊は、支援に派遣したわが陸戦隊なしには出航できず、敵艦隊との間で熾烈な砲火を交えることを覚悟しなければならぬので、  
18 （支援部隊の帰艦なしに脱出を計れば）小官の判断では、以前にも閣下に申し述べたごとく、艦隊は破壊または拿捕されることと料します。

よって、閣下のご命令を遂行できぬ場合が起こることも考えられます。以上をご報告しさらなるご指示をお願い申し上げます。」

こうしておいてセルベラは、夜の7時に艦隊幹部を召集して脱出を再度議す。その際、セルベラはブランコとの間で交信された電文を読み上げ、サンチャゴ市の陥落が迫ったならば、

港の入口で大きな災厄が待ち構えているという観測にもかかわらず、艦隊は脱出を計るべきであるというブランコの考えを報告する。さらにこの日（7月1日）サンチャゴ市の北東ならびに東に位置する市の死命線、エル・カーネイとサンファン高地で熾烈な陣取り合戦が展開され、スペイン駐屯軍は敗退<sup>5</sup>。いよいよサンチャゴ市は敵の攻撃に直接曝されることとなった旨説明した。

それからセルベラは、以上のような事態は、ブランコ総司令官閣下の言われる「脱出を要する緊急事態」と考えられるか否かを、皆に謀った。すると出席者全員が以下のように答えたという。

「市の防衛に貸し出された艦隊の2/3にも当たる兵員が帰艦しなければ、脱出は絶対に不可能である。同時にまた、リナーレス陸軍司令官の公式書簡によれば、伸びきった防衛ラインの維持のための兵も資材もない現状では、艦隊部隊の支援なくば、何もできない。以上を勘案して、市の防衛がもっとも効果的で、かつ、成功の見込みが大きいので、艦隊は陸軍へ協力するために港の入口を遮断する必要がある。」

この段階で艦隊幹部は脱出を諦めたようであった。しかし、彼らを最後まで縛る「海軍軍務規定」があった。セルベラは以上のような艦隊の当面の考え方をブランコ宛に夜中に打電する。

（7月1日夜中、セルベラ→ブランコ総司令官閣下）

「閣下はトラル將軍※から聞かれて本日の出来事をご存じであります。陸上にいる我々の部隊が引き揚げるならば、必ずや市はたちどころに陥落するであろうと將軍は信じておられます。

（一方で）彼らがいなければ艦隊の脱出は不可能であります。小官の意見もトラル將軍のそれも同じであります。艦隊の脱出は敵前逃亡と看做され、あらゆる人々の道義的な反発を喚起するでありましょう。各艦長たちも同意見であります。かねてから申し上げている策の遂行を重ねて具申いたします。」（※この日の戦闘でリナーレス將軍は重傷を負い、トラルがこれを代行。なお、セルベラ艦隊の参謀長ブスタメンテは支援隊を率いて参戦中に腹部に被弾し7月19日サンチャゴ病院で死亡。）

セルベラはマドリッドのアウニオンにも状況を説明し、併せてブランコの指示待ちであることを報告する。夜10時30分打電の至急電報がブランコからセルベラあてに送達される。

（7月1日PM10:30、至急、ブランコ総司令官→セルベラ提督）

「駐屯軍の英雄的防衛にもかかわらず敵の侵攻甚だしいこと、ならびに、政府部内の意見等をも勘案し、貴官は派遣部隊を好機を捉えて艦隊へ撤収してよい。そして、貴官が最良と考える方向へ脱出されたい。その際速度の遅い艦船はどれなりと残置してよい。さもなくば、脱出できる状況にない。

以下は、情報としてのみ貴官に伝えるのであって、決して指示の類いではない。シエンフエゴスには敵艦3隻のみ、ハバナには9隻、いずれも大した勢力ではない。」

それでも心配になったのか追っかけてさらに指示を出す。

（7月1日PM10:45, 至急, ブランコ→セルベラ）

「前信に追加。敵が港の入口を扼す前に、可及的速やかに脱出されたい。」

それからブランコは陸軍（重傷を負ったりナーレスに代わったトラル將軍宛て）へも指示を出す。

（7月1日, PM10:55, ブランコ総司令官→トラル將軍）

「艦隊は降伏も破壊も遁れるために港を脱出せねばならぬが、その前に敵が港口を獲ることをあらゆる手段を使って阻止しつつ、戦力を集中し可能な限り防衛を長引かせよ。」

そして抜かりなくマドリッドの陸軍大臣宛にも報告をする。

（7月1日, ブランコ総司令官→コルレア陸軍大臣）

「セルベラ提督は港からの脱出に難儀しておられるが、これは艦隊が破壊されはせぬかと危惧してのこと。小職は閣下の電信通達（セルベラをブランコの命令系統下に置く旨の通達）に則り、敵が港口を陥す前に好機を捉えて脱出するよう命じた。」

ことここに至っては、セルベラはブランコの命令を遂行するしかない。翌2日明け方に今度はセルベラからブランコへ打電する。

（7月2日, 未明, セルベラ提督→ブランコ総司令官）

「前信拝受。参謀長※をトラル將軍のもとへ遣って閣下の命令を伝えた。陸上部隊の帰還にあわせて脱出できるように、ボイラーの点火を命じた。」（※負傷したブスメンタの後任でコンカス）

折り返しブランコから再度指示が飛ぶ。

（7月2日AM5:10, ブランコ総司令官→セルベラ提督）

「疲弊し切って深刻な状況にある市を考え、陸上部隊を至急取りまとめ艦隊に撤収し出港されよ。」

セルベラはブランコとの間のやり取りをトラルへ伝え、艦隊から派遣した部隊の撤収準備を促す。この点、セルベラ文書、政府側文書ともに、（ブランコ→トラル）間の同主旨の命令電が見当たらない。ブランコは本件を、「現場同志でうまくやれ」とでも思っていたのであろうか。

20

（7月2日, セルベラ提督→トラル將軍）

「（7月1日付け2通のブランコの命令書を参照しつつ）トラル閣下におかれては、ブランコ閣下のご命令を至急遂行するために必要な指示をされるよう通告する。」

（7月2日, トラル將軍→セルベラ提督）で応援の陸戦隊の帰還を指示した旨の報告がく

る。ブランコは命令の徹底を考えたか、トラルへ念を押す。

(7月2日、ブランコ総司令官→トラル将軍)

「AM1:30の貴信拝受。指示を繰り返す。兵力を結集しでき得るかぎり防衛を長引かせよ。艦隊の脱出までは港口を敵の制圧下におかすな。貴職の報告による市の状況を考慮して、艦隊は降伏も破壊もせぬようセルベラ提督に命令した。もし、貴職と貴職の勇敢なる部隊がエスカリオまたはパレツハ旅団の到着まで持ちこたえられるならば、全軍と忠誠心高き市民を糾合し血路を拓きオルギンかマンサニージョへ落ちのびられよ。そして、道々持去れぬものは破壊し、残るものはすべて燃やし、敵の手に勝利のかけらさえも入らぬようにするのだ。いかなる事態に遭遇しても、小職の出した命令にいささかの違背もなきことを信じている。」

陸上の状況はいよいよその厳しさを増す。トラルは刻々と状況をブランコ総司令官へ報告する。

(7月2日、トラル・サンチャゴ師団長※→ブランコ総司令官)

「日の出に敵は市への攻撃を更新し現在も続行中。……セルベラ提督の要求により、アジア大隊が今朝到着したので、艦隊兵士の即時帰艦を命じた。このため1,000名の戦力が欠けた。……状況はいよいよ厳しく支え難くなっている。」(※トラルはサンチャゴ師団長へ昇格か。) 再々度ブランコからトラルへ檄が飛ぶ。

(7月2日、ブランコ総司令官→トラル師団長)

「状況が困難なるは理解している。しかし絶望的ではない。エスカリオ旅団またはパレツハ旅団の支援で状況は改善しよう。どのような事態にあっても、いかなる犠牲を払っても、市は守り通すこと。降伏前に負傷者、病人等は赤十字の支援を得つつ病院に残し、昨夜の小職の指示(オルギンかマンサニージョへ落ちのびること)を遂行のこと。

要は、艦隊がただちに港を出ることであり、もし米国に拿捕されでもしたら、スペインは真に意気沮喪して敵の慈悲に縋って平和を求めることとなろう。失われた市は回復できる。しかし、このような状況で艦隊を失えば、それが最後で再び回復することはできない。何が起こったか、そして貴職はどう考えるか、絶えず連絡し報告されたい。」

同時にブランコはマドリッドへの報告も忘れない。

(7月2日、ブランコ総司令官→コルレア陸軍大臣)

「艦隊の即時脱出を指示した。港口を敵に取られたら、その時点で艦隊は全滅であります。」

21

## 2-5 敗戦

艦隊は7月3日の朝、出動した。当然のことながら、その間はセルベラ側からの連絡報告は途切れる。残されたスペイン側は、陸上からの観測と噂話し等で推測するしかない。

午前8時、旗艦マリアテレサからセルベラは最初の指示を出す。

「行動開始」。つづいて、「各艦ハカネテノ手筈ニ従ッテ脱出セヨ」、そして最後に「スペイン万歳!」。

敵はサンチャゴ・デ・キューバ港の沖合いを半円形に封鎖して、穴からネズミが出て来るのを、袋を持って待つような状況であった。

封鎖の陣容は、半円の東から西へかけて改造ヨットグロウスター、戦艦インディアナ、オレゴン、アイオワ、テキサス、装甲巡洋艦ブルックリン、ヴィクセン、それにもう1隻改造ヨット、計8隻の艦船をもって対峙していた。総排水量で米艦隊は49,038トン、セルベラ艦隊は28,280トン、搭載大型口径砲米艦76門、スペイン42門と圧倒的に米艦優位の戦力で戦いの火ぶたは切って落とされた。

本稿の目的からは外れるので、戦闘場面の詳述は避けるが、戦闘の第1報はハバナの海軍工廠長官マンテローラからマドリッドのアウニオン海軍大臣へ打電された。

（ハバナ、7月3日ハバナ海軍工廠長官マンテローラ→アウニオン海軍大臣）

「サンチャゴ海軍司令官より連絡あり。艦隊は敵の砲火に掻き消されそうになりながらも砲火を返し、明らかに封鎖突破に成功、西方へ向かった。」

しかし、時間がたつにつれて情報がふえてくる。遙か海上沖合いでスペインの艦船と思われるものが黒煙を吹き出しているのが遠望できる。そのうちに見るも無惨な姿のスペイン兵が1人、2人と海岸へ泳ぎ着いてくる。それらの者らから、断片的にだが、凄まじい敗戦の様子が少しずつ明らかにされてくる。この日、サンチャゴ師団長トラルも情報を掻き集めてブランコ総督へ報告する。

「…マリアテレサは見えなくなった。オケンドは火災、セルベラ提督は行方不明…」

しかし情報が増加するに従ってスペインの敗色はいよいよ濃くなり、先のマンテローラは、自分が打った第一報に訂正伝票を振らざるを得なくなる。

（ハバナ、7月5日、ハバナ海軍工廠長官マンテローラ→アウニオン海軍大臣）

「サンチャゴ海軍司令官からの直近の報告は不確定であります。……」と報告して、マリアテレサの水兵が続々と海岸へ戻ってきており、その者らの話から総合して「マリアテレサ、オケンド、ブルトン、フロールの各艦は出火して座礁。コロン、ビスカヤの2艦は敵の追撃もなく視界から消えた。セルベラ提督は依然として行方不明」と追加して伝える。

そしてついに、7月5日に当のセルベラ本人からブランコ宛に戦闘報告の略報が届いて、可成りのことがわかってくる。この報告は囚われの身となったセルベラが Sampson 提督に依頼して届けられたもので、日付は7月4日付けとなっていた。

22

（プラヤ・デル・エステ、7月4日、セルベラ提督→ブランコ総司令官）

「総司令官閣下のご命令を体して小官は昨日の朝全艦隊をもって港から外洋へ出港いたしました。わが軍の3倍の戦力を持つ敵との戦闘の後、艦隊は全滅しました。……」として、マリアテレサ、オケンド、ビスカヤは出火して座礁。コロンは米側の情報によれば、座礁して降伏。ブルトン、フロールの2駆逐艦は沈没。兵員の損失は不明ながら600名は戦死の様相。

指揮官ではビジャアミル（駆逐艦小艦隊ブルトン、フロール、テロールの司令官。たまた

マテロールはこの時プエルトリコにいて無傷)とラサガ(オケンド艦長)は戦死。コンカス(マリアテレサ艦長)とエウラテ(ビスカヤ艦長)も負傷と伝えて来る。

ブランコは、この報告をコレリア陸軍大臣宛に転送する。さらに、これまで自分に来た戦況報告を取りまとめて、マンテローラ海軍工廠長官経由でアウニオン海軍大臣宛にも転送させる。その際に、あろうことか、責任転嫁の発言を書き添えさせる。

(ハバナ, 7月6日, マンテローラ海軍工廠長官→アウニオン海軍大臣)

「サンチャゴからは連絡無し。……ブランコ総司令官閣下のご指示によりセルベラ提督からの報告を、同閣下の下記の但し書きを添付して、転送いたします。

『AM9:45にセルベラは脱出を図ったが、自分はその時刻のサンチャゴからの脱出を命令はしなかった。』

後に、この責任回避を図る但し書きを知ったセルベラはブランコとの間で可成りトゲのあるやりとりを展開する。敵艦セントルイス艦上に捕われの身となったセルベラが、7月9日付けで海戦の詳細を、各艦の艦長(艦長に事故ある場合には副官)の報告を添えて、ブランコへ送付してきた。

それによると、午前9時35分に旗艦マリアテレサを筆頭に、ビスカヤ、コロソ、オケンド、駆逐艦(フロール、プルトン)の順に出撃。駆逐艦2隻が港口に姿を現したのは午前10時10分であったという。

最初マリアテレサは、後続の艦が逃げ易いように、俊足ブルックリンの船足を止めさせるような位置決めを図ったが、スチームパイプとボイラーに被弾し船足の低下を余儀なくされたところへさらなる被弾で火災が発生。10時35分には意を決して自ら座礁した。

続いたオケンドも被弾して火災が発生し止むなく10時40分マリアテレサの座礁地点の西方の海岸へ座礁。フロール、プルトン共に火災を発生させて10時45分に、前者は沈没、後者は座礁して果てた。

午前11時現在で生き残っていたのは、西方シエンフェゴスへ向けて脱出せんとしていたビスカヤとコロソの2隻だけとなっていた。ビスカヤは同11時15分集中砲火を浴びてスチームパイプとボイラーが爆発して火災発生、止むなく海岸へ座礁。コロソは自慢の船足を駆って西方へ逃走。途中、大型口径砲がないことから、敵追跡艦への攻撃もままならず、午後1時ごろから急に減速しだして敵に拿捕されそうになり、午後2時に13ノットの速度で海岸へ突っ込んだ。

白昼の脱出を選んだのは、セルベラによれば、夜だと死傷者の数が増加するであろうから、それだけはぜひとも避けねばならぬと考えたことによる。ならば、一列縦隊で脱出してむざむざと敵の餌食になる愚を何故冒したか。これは、港口近辺が狭いうえに、敵は艦船を意図的に沈めて水路を極端に浅くしたため(6月3日の戦闘時に米国は水路狭窄を意図して石炭運搬船メリマックをサンチャゴ湾口部へ沈没させた…前出)に、1艦ずつしか外洋へ出ることができなかったためという。

23

結果は海戦史上稀に見るスペイン側の完敗に終わった。

7月3日の戦闘の結末は、コンカスによれば、スペイン側一死者323名、重傷151名、計474名(また、戦闘参加人員2,227名中米国に捕われた者1,720名)、に対し米側は僅かに1名

の死者（戦艦ブルックリンの倉庫係の下士官G. W. エリス）であったという<sup>6</sup>。

それでも、出撃命令の責任は自分にはないとまで言ったブランコには、現実が未だに理解できなかったものか、引き続き、囚われのセルベラ宛に妙な書簡を送る。

（ブランコ総督→セルベラ提督，7月11日ポーツマスで受理）

「劣悪な条件下で勇敢に戦って倒れた我が国の英雄的な防衛者らに慰撫の言葉と賞賛を捧げたく……」と、美辞麗句で彩られた「おためごかし」を並べ立てるが、本心は隠せない。「…艦隊の屈服は栄光に満ちたものであり、それはサンチャゴ・デ・キューバ港内で艦隊を覆っていた大きな危険がそれほどのものでないと判断された時に行われた。…」

しかし、脱出の判断基準は上記のようなものではなかった。艦隊脱出の条件は、陸上戦闘が急でサンチャゴ市が陥落の瀬戸際に立つと判断された時に行うことは、[セルベラ→ブランコ→トラル]の3者間で決められたことであった。それもセルベラがブランコを問い詰めて、やっと明確にさせたものであった。

ブランコは、今回の敗戦がセルベラの失策と決めつけたかったのか、それとも、総督兼総司令官として、そういうセルベラをよく統率できなかったという批判を怖れたのか、マドリッドへそしてセルベラへと妙な書簡、報告の類いを頻発する。

（7月12日，ブランコ総司令官→セルベラ提督，ポーツマス米海軍ベース）

「昨日付け貴信（7月9日付けの海戦報告のことか？）に深く感銘いたし司令官、将校、兵士らに敬意を表します。多分、他の機会を選んで出撃をすれば、結果は違ったものとなっていたことでしょう。サンプソン提督の報告では、彼の軍の負傷者はわずかの3名であった由。そんなことが可能でしょうか？……」

マドリッドにおける対応能力の欠如と思いつきを時の宰相サガスタが代表すれば、植民地キューバではブランコがそれを代表する。これでは、死んで行く者は浮かばれない。セルベラ艦隊は政治の「贖罪のヤギ」であったと言え言い過ぎであろうか。この後ブランコとセルベラの間で確執は続くが、本稿の目的からは外れるので止める。

### 3 セルベラ資料の吟味と評価

さて、これまで我々は、命令を遂行した軍人が提供する一次史料を通じて、命令を出した政府の信じられぬくらいの当事能力の欠如と思いつきの実態と、その痛ましい結末の数々を見てきた。幸い、当時のスペイン政府はこの戦争に関して、海軍省から『対米戦（1898年）における海軍の作戦と軍事行動に関する公式連絡通信記録』（註4に記載）を公表している。

本節では、この資料とセルベラ文書との突き合わせをすることによってセルベラ資料の吟味と評価をする。その目的は、セルベラが、自説を有利に展開せんとして、記録の意図的な取捨選択を行なったか否かを確認するためである。

政府文書は海軍省を中心とする関係省庁が3つの海域（フィリピン、キューバ、アンティル諸島）を担当する各艦隊と予備役艦隊の計4つの艦隊との間で交わした、指示、命令、作戦示達、情報連絡、報告、建策、意見交換、陳情等の交信記録である。そのうち『キューバ

作戦の艦隊』の項に記載された交信記録と、セルベラ文書の中の交信記録との突合が可能となっている。

まず、セルベラ文書は（1897年11月28日付けベルメッホ海軍大臣→セルベラ提督）の書簡から始まって（1898年10月7日付けセルベラ提督→ブランコ総督）の書簡で終わる、全302通に及ぶ通信を日付順で提示している。これに対して政府文書は、（1898年1月8日付けブランコ総督→R. ヒロン植民地省大臣）の書簡から始まって（1898年9月20日付けセルベラ提督→アウニオン海軍大臣）の書簡で終わる全204通を、やはり日付順に記載している。両文書での掲載の有無を調べると次の通りとなる。

- (1) 両文書に掲載されている通信 195通
- (2) セルベラに掲載のない政府掲載通信 9通
- (3) 政府に掲載のないセルベラ掲載通信 107通

セルベラ資料の期間は「1897年11月28日～1898年10月7日」で政府資料のそれは「1898年1月8日～1898年9月20日」となっており、両資料の期間に相違があるが、はみ出した期間でのセルベラ資料の数は僅かに3通となっているから、上記（3）の107通のうち104通が同一期間内での差異となる。そこで、（2）と（3）の内容をみると以下のようになる。

(2) の内訳 (いずれも 1898年)

- イ 5月23日セルベラア→ウニオン (現況報告)
- ロ 6月2日アウニオン→セルベラ (問い合せ)
- ハ 6月21日ブランコ→リナーレス (戦術に関する意見表明—セルベラ艦隊がサンチャゴ・デ・キューバ港に停泊をつづけるならば、同艦隊の兵員と正確で射程の長い火器を陸軍で使えば良いとするもの)
- ニ 6月25日ブランコ総督→リナーレス・サンチャゴ・デ・キューバ陸軍司令官 (セルベラ艦隊は機を狙って同港からの脱出を図るべきで、艦隊にとって日を追うごとに状況は悪化し、その存在はすべてを危険に巻き込むとの意見表明)
- ホ 7月21日セルベラ→マック・ネアー米海軍兵学校総監 (ハーバード号事件<sup>7</sup>に関する所見と嘆願書)
- ヘ 8月29日セルベラ→マック・ネアー (スペイン側将校ファン・B・アスナールが作成したハーバード号事件の調書の送り状)
- ト ヘ記載のハーバード号事件調書
- チ 9月1日C・H・アレン米海軍省長官→セルベラ (上記事件に関する所見と処置の通知)
- リ 9月21日セルベラ→アウニオン (サンタンデルへの帰還報告)

これを見る限り、セルベラ側の削除に何らかの意図があったとは思えない。イ、ロ、リは単なる情報連絡であり、ホーチは戦後虜囚となつてからの、捕虜取り扱いに関する米側とのやりとりであつて、セルベラが真に訴えようとしている主題からは2次的なものといえる。対米戦略、戦術の観点からはハとニが意味合いを持っている。いずれもブランコ総督の支離滅裂な考えが表出した連絡といえる。しかし、この二つの記録をセルベラが、自らの考えをより鮮明にせんとして、意図的に削除したとは考え難い。支離滅裂なブランコの連絡であれば、むしろ意図的にこれを取り込むと考える方が合理的であろう。

（3）の内訳

さて、今度はセルベラにあって政府にない107通の通信について吟味をする。その内容をつぶさに検討すると、政府がこれら通信を省略したことに何らかの意図を感じざるを得ない。107通の内訳は、イ 政略に関するもの2通、ロ 戦略に関するもの8通、ハ 軍備に関するもの11通、ニ 艦隊作戦会議の議事録4通、ホ 受発信にブランコ総督が絡む通信16通、ヘ その他66通 計107通となっている。その明細は以下の通り。

イ 政略に関して政府側に欠落している通信

- (a) 1898年2月26日セルベラ→ベルメッホ（キューバ不要論を唱え、対米戦の無意味を主張）
- (b) 1898年3月4日ベルメッホ→セルベラ（「私信・親展」(a)への反論と自身の対米政略と戦略の概要）

ロ 戦略に関して政府側に欠落している通信

- (a) 1898年4月4日セルベラ→ベルメッホ（当時、魚雷搭載駆逐艦小艦隊のプエルトリコ向け派遣方が議論されていたが、これはその不可を論じたもの）
- (b) 1898年4月4日ベルメッホ→セルベラ（予想される対米戦の作戦概要を作成するための関係データを要求するセルベラに対して、「現今のごとき国際的危機に際し明快な計画策定は不可」として、資料の提供を拒否）
- (c) (b)と同日付、同主旨の「私信」[(b)に加えて、『国際危機を前にして、目下、外交がその影響を及ぼして、対立の中断と彼我両海軍の状況が論議されているいま、何の計画もいかなる決定もなし得ない』]
- (d) 1898年4月6日セルベラ→ベルメッホ（カナリア諸島を拠点とする先守防衛論の展開）
- (e) 1898年4月7日ベルメッホ→セルベラ（近々出動命令が発せられるとの予告。詳細は言わず）
- (f) 1898年4月8日セルベラ→ベルメッホ（4月7日付け命令「艦隊は明日出港のこと。ケーベルデ諸島サント・ビンセントへ進むべし…」）に対して、セルベラは、作戦の全体像を明示せよと要求。さらに(d)と同じ主張を繰り返す）
- (g) 1898年5月25日アウニョン→セルベラ（艦隊はサンチャゴ・デ・キューバ港に留まって徒に出撃しないという艦隊幹部全員の作戦を容認。さらに「艦隊に無為な犠牲を強いてはいけない」とまで言う）
- (h) 1898年6月3日コルレア国防省長官→ブランコ総督（セルベラ艦隊を暫定的にフィリピン海域へ回してくれぬかという依頼と問い合わせ）

ハ 軍備に関して政府側に欠落している通信

26 戦備全般について、不備と欠陥、あるいは、供給がまったくないことへの度重なる改善要求の連絡が全部で11通あり、この全部が政府記録にはない。

ニ セルベラ艦隊の作戦会議議事録（艦隊司令官全員の記名捺印付き）

- (a) 1898年5月24日（艦隊はサンチャゴ・デ・キューバ港に留まり出港すべきではないという全員一致の決議録）
- (b) 1898年5月26日（艦隊の出港につき意見が割れた。セルベラ他多数が出港に反対。艦

隊参謀は死中に活を求めべきだと主張)

- (c) 1898年6月24日(港に留まり、陸軍との共同で専守防衛を全員で決議。この段階では戦況の絶対的な悪化を理由に、先のブスタメンテ及びコンカス両名も出港案を撤回)
- (d) 1898年7月1日(セルベラが、作戦会議で、断固港からの脱出を主張して止まないブランコ総督案を報告。この時点で艦隊の2/3にあたる陸戦隊を当地の陸軍へ派遣していて、戦闘はおろか、出港の準備ができない状態にあった。また、派遣兵員を艦隊へ戻すことは、戦闘中の陸軍の壊滅を意味した。よって、港湾部を遮断して先専守防衛をすることを全員が主張)

艦隊の議事録では4月20日に洋上のコロソ号で行なわれたものは政府側の記録に記載されている。ここでは艦隊の司令官全員が対米専守防衛論を唱えて艦隊のカリブ海域への出動に反対した。政府記録はどのような基準で議事録掲載の是非を決めていたのであろうか。

ホ ブランコ総督が受発信に絡む通信(いずれも1898年)

ブランコ総督が絡む通信については、「ブランコニ海軍省等の政府機関」,「ブランコニセルベラ」,「ブランコニ在キューバの海軍と陸軍」が掲載されている。政府側になくてセルベラ側に掲載されている通信16通の内訳は以下のようになっている。

- (a) 「ブランコニナールス・キューバ陸軍司令官」および「ブランコニマンテローラ・キューバ海軍工廠長官」(5月19日, 21日, 23日, 23日, 25日, 26日, の7通): いずれもサンチャゴ・デ・キューバ港停泊中の艦隊を敵は同港湾へ封じ込めんと企図がある模様であるから港湾部入口の監視を強化して、この計画の実施を阻止せねばならないとしている。
- (b) ブランコニセルベラの7月3日(サンチャゴ海戦)以前のもの2通  
 (5月19日): サンチャゴ・デ・キューバ港へ無事入港した旨のセルベラの報告  
 (6月27日): ブランコニセルベラ(「貴艦隊に関する貴職の意見、それが脱出の可否、ならびに、貴職にとって最善の策とは何か。以上を忌憚なく申し出られたい」)
- (c) ブランコニセルベラの7月4日(サンチャゴ海戦敗戦後)以降のもの(8月7日, 9月15日, 10月7日, 10月7日の4通)
- (d) ブランコニR.ヒロン植民地大臣(5月17日): 「『セルベラ艦隊は状況によっては本国帰還もあり得べし』とする海軍省訓令電」の有無の問い合せと艦隊のキューバ来航必須論を説いたブランコ書簡。この本国帰還の海軍省訓令電は5月12日に発令され5月19日に取消された。また、セルベラが発電の事実を薄々知ったのはサンチャゴ・デ・キューバ入港後と言っている<sup>8</sup>。
- (e) ブランコニコルレア陸軍大臣(6月3日): セルベラ艦隊をフィリピン海域へ一時的に廻してくれぬかという依頼。

27

さて、上記(3)の内訳イーホを巨細に見ると、政府がこれらの通信を掲載しなかったことに「故意」を認めざるを得ない。何故なら、そのすべてが政府(ブランコ総督も含めて)の無能と失態を明かす通信となっているからである。この意味で、編集方針が偏っているのは政府文書であって、セルベラ文書ではないことは明確である。

もう一つ注意しなければならない点がある。それは、政府高官(ブランコ総督を含む)が

発信した「私信」, 「私信－親展」扱いの通信は, その内容を問わず, もれなく掲載をしていないことである。「私信」であるから「官」は関係がないということであろうか。しかし, ここに一つだけ例外がある。6月28日付けブランコセルベラの「私信－親展」扱いの通信である。これは政府資料のなかに掲載されている。それは以下のようになっている。

「6月28日付け『私信－親展』扱。昨夜貴信拜受。サンチャゴ・デ・キューバの状況の打破改善方を熱望する。貴職宛レーション（糧食）を送るべく最大限の努力中。もし成功せば一層の補給物資を送る所存。こうして防衛を長期化させ, 封鎖を解かせ, 貴艦隊を救うこととなる。小職の策が奏功せずば, 貴職もご認識のごとく, 艦隊はその困難にかかわらず同港を去らねばならず, 小職はそれを高く評価するものである。よって, 貴職にその遂行を望む小職の計画は以下のごとくである。艦隊は港内に残り, 急がずに, 食料が残っているという前提で, 貴職がベストと判断する方角へ脱出をすべく好機を窺う。しかし, 事態の悪化が急で, サンチャゴ・デ・キューバ市の陥落が間近かと思われる状況では, 艦隊は, 貴職とその卓越せる司令官らの存在と高い能力に, 自らの運命を委ねて, 直ちに脱出しなければならない。かくして貴職ら司令官らは, 日頃から享受せる自らの名声を確認できるであろう」

この訓令の重要なところは, サンチャゴ市の陥落がまじかに迫ってくるのが艦隊脱出の必要条件となっていることである。それならば, 市の陥落がまじかに迫っていることを, 誰がどのような手立てでそれを判断してセルベラに伝えるのか。この点が不明確であるから, さらに明確な指示をくれとセルベラは何回もブランコあてに要求する。結果として, この通信もブランコ総督の不能振りを見事に露呈することとなる。それを敢えて掲載した国務省は, 底意地が悪かったのであろうか。あるいは, 当方もまた底意地悪く勘ぐれば, 政府文書が公開された時点では, サガスタ政権の信用は当然地に落ちていたであろう。政府高官ブランコ総督の命運もサガスタ政権のそれと軌を同じくしたであろうから, 本書を公開した国務省にとって, ブランコ総督はいまや何でもない存在であったのかも知れない。

#### 4 おわりに

その後両国はフランスの仲介により8月12日に休戦し, 12月10日パリ和平条約を締結してこの戦争を終結した。パリ和平条約はスペインに大きな代償－キューバの完全独立の承認, プエルトリコ, グアム両島の米国への割譲, フィリピン島の米国への売却（価格2千万ドル）等－の支払いを課した。この結果スペインは15世紀末以来所有し続けてきた植民地の大半（モロッコの一部を除き）を失い, スペインの人々に大きな挫折感と心的外傷を与えた。

この時期, 国際社会は新たな秩序形成へ向けて急速な変容を遂げつつあった。19世紀初頭のナポレオン戦争以降, その枠組の崩落が始まったヨーロッパ旧世界は19世紀末に至りアメリカ, 南米諸国, そして日本, 中国等のアジア諸国が参加する主権的国民国家を中心的構成員とする新たな国際社会の編成へ向けて, その変容の度合いを速めていた。米西戦争はこの動きをさらにいっそう加速させたものといえる。この場合の旧世界の枠組の崩落とは旧世界秩序の崩落であり, 旧世界の政治, 経済, 社会, 文化等万般にわたる価値と原理の変化を意味する。結果として各国はこの急速に編成されつつあった新国際秩序に対応すべく, 新たな国内秩序の模索・再編・構築を強いられることとなった。この一連の作業については, 國によりその巧拙と成否を分けた。

これまでわれわれはセルベラが時系列に提示した、彼と主として海軍省との間でやりとりされた電文、書簡等をベースに、「対米政策の決定」にまつわる政策当局の当事能力の欠如と思いつきの実態を見てきた。同時にその政策を遂行する側の惨状をもつぶさに見てきた。その酷さは事程左様なものであった。

この現実、これをスペイン一國史という文脈において見るとき、古習旧弊に惑溺したものの考え方、人材の不足、非効率な組織体制等にその原因を帰することができる。さらにこれをより広義の国際関係史という文脈に置いて見るとき、この敗戦は、変容を遂げつつあった国際秩序へ対応できる新たな国内秩序の構築にスペインが蹉跎していたことを示している<sup>9</sup>。戦後のスペインの復興に関しては稿を改めて論じたい。以上

(脚註)

<sup>1</sup> David F. Trask, *op. cit.*, pp.127-130.

<sup>2</sup> Concas, *op. cit.*, 7章

<sup>3</sup> David F. Trask, *op. cit.*, pp.202-203.

<sup>4</sup> この時点でブランコが艦隊を政治の具として扱ったことはセバスチャン・バルフォアも認めている。さらに、開戦を決意したスペインの体制(レジーム)はアメリカの軍事を過小評価していたきらいがあり、開戦後適当なところで負けて、もともとその経営が困難となっていたキューバを手放せば国内世論を納得させることができると踏んでいたふしがあるという。ところがふたを開けてみると、予想を大幅に超える敵の圧倒的な軍力の前に為すすべもなく敗退して「1898年の災厄」を招来たという。

Sebastian Balfour, *The End of the Spanish Empire 1898-1923*, Clarendon Press, Oxford, 1997, pp.42-46.

<sup>5</sup> この日の陸戦は熾烈で、両軍の死傷者は、スペイン一戦死215人、負傷者376人、捕虜2人、計593人、アメリカ一戦死者205人、負傷者1180人、計1385人。兵力は、エルカーネイで米は西の12倍、サンファン高地で16倍であったという。地の利、作戦の良否、運不運等を勘案してもスペインは善戦奮闘した。

David F. Trask, *op. cit.*, pp.244-245.

<sup>6</sup> スペインの史家セヴェロ・ゴメス・ニューニェスの推計ではスペインの死者は253名、米国に捕われた者1670名とある。また、「アメリカスペイン国交史」の著者、米国の海軍士官F. E.チャドウィックは、スペイン側の死者264名と推計している。

<sup>7</sup> 戦艦ハーバード号事件：米戦艦ハーバード号がスペインの捕虜約500名を収容してポーツマスへ航行中に起きた事件。7月5日未明2時頃、一団の捕虜の中から一人の水兵が船内の進入禁止区域へ入ろうとした。米軍警備兵は、進入禁止と警告を發したが、件のスペイン水兵は構わず進入して行ったために、警備兵は発砲。このため捕虜4人が死亡、14人が負傷を負った(後刻このうちの一人が死亡して死亡者は計5名)。さらに、船内の他の場所に収容されていた捕虜らが、船内火事と勘違いしてパニックに陥り、多くの者が海へ飛び込むなどした。

<sup>8</sup> Cervera, *op. cit.*, p.73., 脚注

<sup>9</sup> 石倉幸雄, 前掲論文「米西戦争におけるスペイン大西洋艦隊の迷走(1)」(註1), 46-47頁

付一 2 参考文献（文献挙示は史学会『史学雑誌』の方法による）

I 一次資料

1 記録

Biblioteca Nacional, Diario de las Sesiones de las Cortes

2 政府刊行物

・ Ministerio de Estado, *Documentos Presentados Á Las Cortes en la Legislatura de 1898 por El Ministro de Estado, Madrid 1898* —

① Negociaciones Generales con Los Estados Unidos desde 10 de abril de 1896 hasta la declaración de guerra

② Negociaciones Diplomáticas desde el principio de la guerra con Los Estados Unidos hasta la firma del protocolo de Washington

③ Conferencia de París y tratado de paz de 10 de Diciembre de 1898

・ Ministerio de la Marina, *Correspondencia oficial referente á las operaciones navales durante la guerra con Los Estados Unidos en 1898.*

・ Ministerio de Ultramar, Dirección general de Hacienda- Negociado de Tesoro, *CUENTA GENERAL DE LA CAMPAÑA -Ingreso y pagos desde 4 de Marzo de 1895 á 31 de Diciembre de 1897*

・ Ministerio de Hacienda, Instituto de Estudios Fiscales, *Datos Básicos para la historia financiera de España (1850-1975)*, Vol 1, 2.

3 新聞雑誌等

・ *The Economist* (London)

4 回想録等

・ Pascal Cervera y Topete, *Guerra hispano-americana. Colección de documentos referentes a la escuadra de operaciones de las Antillas, El Ferrol, 1899*

・ Víctor M. Concas y Palau, *La Escuadra del Almirante Cervera* (Madrid, n. d.)

なお、本稿で使用の上記2本はいずれも米海軍情報部が翻訳したもので前者が1899年、後者は1900年にいずれも政府刊行物としてワシントンで公開されたもの。

・ Gabriel Maura Gamazo, *Historia crítica del reinado de don Alfonso XIII durante su minoridad bajo la regencia de su madre doña María Cristina de Austria*, Barcelona, Montaner y Simon, (n.d.)

II 二次資料

30

1 スペイン史

(1) 一般

・ Antoino Domínguez Ortiz, *España, Tres milenios de Historia*, Madrid, Marcial Pons, 2000

・ Carlos Serrano, *El Turno del Pueblo Crisis Nacional, Movimientos Populares y Populismo en España (1890-1910)*, Traducción de María del Mar Duró, Baelona, Ediciones Península, 2000.

La edición original francesa de esta obra fue publicada en 1987 por Casa e Velázquez (Madrid), con el título : *Le Tour du peuple : Crise nationale, mouvements populaures et populisme en*

*Espagne (1890-1910)*

- ・ Gerald Brenan, *The Spanish Labyrinth*, London, Cambridge Univ. Press, 1943
- ・ J. B. Trend, *The Civilization of Spain*, London, Oxford Univ. Press, 1944
- ・ José Varela Ortega, “Del desastre y sus consecuencias”, en José Varela Ortega, (ed.), *Imágenes y ensayos del 98*, Valencia, Fundación Cañada Blanch, 1998
- ・ Juan Pablo Fusi, *España-La evolución de la identidad nacional*, Madrid, Tema de Hoy, 2000  
\_\_\_\_\_ : “El legado del 98”, en José Varela Ortega, (ed.), *op. cit.*
- ・ Mercedes Cabrera, “Restauración”, *El País*, 26, Septiembre 1997
- ・ Raymond Carr, *Modern Spain 1875-1980*, Oxford, (n.d.), Oxford Univ. Press, (first published in 1980)
- ・ Sebastian Balfour, *THE END OF THE SPANISH EMPIRE 1898-1923*, Oxford, Clarendon Press, 1997,
- ・ 立石博高編『スペイン・ポルトガル史』, 2000年, 山川出版社

(2) ナショナリズム関連

- ・ Borja de Riquer i Permanyer, “La débil Nacionalización Española del siglo XIX”, *Historia Social*, No.20, otoño 1994
- ・ Clare Mar-Molinero, “The role of language in Spanish Nation-Building”, Clare Mar-Molinero and Angel Smith, (eds.), *nationalism. and the nation in the Iberian peninsula, competing and conflicting identities*, Oxford, Berg, 1996
- ・ José Alvarez Junco, “The nation — building process in nineteenth-century Spain”, Clare Mar-Molinero and Angel Smith, (eds.), *ibid.*
- ・ Sebastian Balfour, “The Lion and the Pig : Nationalism and National Identity in Fin-de-Siècle Spain”, Clare Mar-Molinero and Angel Smith (eds.), *ibid.*
- ・ 立石博高「国民国家の形成と地域ナショナリズムの擡頭」, 立石博高・中塚次郎編『スペインにおける国家と地域ナショナリズムの相克』, 2002年, 国際書院

(3) 外交関連

- ・ José María Jover Zamora, *España en la Política Internacional siglos XVIII~XX*, Madrid, Marcial Pons, 1999
- ・ Luis Álvarez Gutiérrez, “Los imperios centrales ante el progresivo deterioro de las relaciones entre España y los Estados Unidos”, *Hispania*, LVII/2, núm. 196 (1997).
- ・ María Dolores Elizalde, “La proyección de España en el Pacífico durante la época del imperialismo”, *Hispania*, LIII/1, núm. 183 (1993)
- ・ Rosario de la Torre Del Río, “La Crisis de 1898 y el problema de la garantía exterior”, *Hispania*, 31  
XIVI, 1986,  
\_\_\_\_\_ : 1895-1898 : Inglaterra y la búsqueda de un compromiso internacional para la intervención norteamericana en Cuba, *Hispania*, LVII/2, Núm. 196, 1997
- ・ Sebastian Balfour, “España y Las Grandes Potencias y los Efectos de 1898”, Sebastian Balfour y Paul Preston, (eds.), *España y las Grandes Potencias en el Siglo XX*. (英語版 : Spain and the Great Powers in the Twentieth Century の西訳版)

（4）経済関連

- ・ Francisco Comín Comín, *Hacienda y Economía en la España Contemporanea (1800-1936) Vol I & II*, Instituto de Estudios Fiscales, Ministerio de Economía y Hacienda, 1988
- ・ Gabriel Tortella Casares, *Los Origenes del Capitalismo en España, Banca, Industria y Ferrocarriles en el siglo XIX*, tecnos, 1973, (n.p.)
- ・ Inés Roldán de Montaud, “Guerra y finanzas en la crisis de fin de siglo : 1895-1900”, *Hispania*, LVII/2, Núm. 196 (1997)  
\_\_\_\_\_ : *La Banca de Emisión en Cuba (1856-1898)*, Estudio de Historia Económica, Madrid, Banco de España Servicio de Estudio, 2004
- ・ Jordi Maluquer de Montes, *España en la crisis de 1898. De la Gran Depression a la modernización económica del siglo xx*, Barcelona, Península, 1999
- ・ Leandro Prados de la Escosura, *De imperio a nación Crecimiento y atraso económico en España (1780-1930)*, Madrid, Alianza Editorial, 1988.  
\_\_\_\_\_ : *Comercio exterior y crecimiento económico en España, 1826-1913 : Tendencia a largo plazo*, 1982, Banco de España. Servicio de Estudios, Estudios de Historia Económica, 1982, Madrid

（5）その他

- ・ María Dolores Elizalde Perez-Gruoso, “Balance del 98. Un punto de inflexión en la modernización de España o la desdramatización de una derrota”, *Historia y Política*, Marzo, 2000
- ・ Rosario Sevilla Soler, *La Guerra de Cuba y la memoria colectiva, la Crisis del 98 en la prensa sevillana*, Escuela de Estudios Hispano-Americanos, Sevilla, 1996

2 アメリカ史

- ・ Alexis de Tocqueville, *Democracy in America*, translated by George Lawrence, edited by J.P.Mayer, Perennial (edition of 2000), N.Y.
- ・ David M. Kennedy, Lizabeth Cohen, Thomas A. Baily, *American Pageant*, (twelfth edition), Boston, Houghton Mifflin, 2002
- ・ Robert H. Wiebe, *The Search for Order 1877-1920*, Hill and Wang, 1967, N.Y.  
\_\_\_\_\_ : *The Segmented Society : An Introduction of the Meaning of America*, Oxford Univ. Press, 1976, N.Y.  
\_\_\_\_\_ : *Self Rule A cultural history of American democracy*, The Unniversity of Chicago Press, Chicago and London, 1995
- ・ Milton Friedman and Anna Jacobson Schwartz, “A monetary history of the United States. 1867-1960” A study by the National Bureau of Economic Resaerch, N.Y., Princeton University Press, Princeton, 1963 (paperback edition)
- ・ アメリカ歴史学会訳編『原点アメリカ史』, 岩波書店, 1985年第2印発行, 第1印発行は1950年9月
- ・ 有賀一他編, 『アメリカ史1』, 山川出版社, 1994年

32

3 キューバ史

- ・ Allen Wells (Bowdoin College), “Did 1898 Mark a Fundamental Transformation for the Cuban Sugar Industry?”, *Paper presented at the Latin America and Global Trade Conference*, Stanford,

Stanford Univ., Nov. 16-17, n.d.

- ・ Augusto Castro, “La Guerra de 1898 y su relación con el pensamiento de América Latina”, *Iberoamericana*, VolXX, NO.1, 1998.
- ・ Candelaria Saiz Pastor, “Imperio ultramar y fiscalidad colonial” in Salvador Palazón Ferrando, Candelaria Saiz Pastor, (eds.), *LA ILUSIÓN DE UN IMPERIO Las relaciones económicas hispano-americanas en el siglo XIX*, Universidad de Alicante, 1998
- ・ José G. Cayuela Fernández, *Bahía de Ultramar, España y Cuba en el siglo XIX. El control de las relaciones coloniales*, Madrid, Siglo XXI de España, Editores, 1993
- ・ Óscar Zanetti Lecuona, “Las relaciones comerciales hispano-cubanas en el siglo XIX”, in Salvador Palazón Ferrando, Candelaria Saiz Pastor, (Eds.), *op. cit.*
- ・ Susan J. Fernandez, *Encumbered Cuba-Capital Markets and Revolt 1878-1895*, Gainesville, Univ. Press of Florida, 2002

#### 4 諸統計

- ・ Michael G. Mulhall, *Industries and Wealth of Nations*, Longmans Green and Co, London, 1896
- \_\_\_\_\_ : *The Dictionary of Statistics*, G. Routledge, London, 1899
- ・ Paul Bairoch, “Europe’s Gross National Product : 1800-1975”, *The Journal of European Economic History*, Vol 5, Number 2, Fall 1976

#### 5 国際法

- ・ Walter Ullman, *Principles of Government and Politics in the middle ages*, Methuen & Co Ltd., London, 1961
- ・ 宮崎茂樹編, 『国際法』同文館, 昭和56年5月15日
- ・ 香西 茂他編, 『国際法概説 (第4版)』, 有斐閣双書, 2001年
- ・ 横田喜三郎, 『国際法』, 有斐閣, 1960年
- ・ 田畑茂二郎, 『現代国際法の課題』, 東信堂, 1991年, ならびに, 『国際法講義上下』, 有信堂, 1986年
- ・ モーゲンソー 『国際政治—権力と平和』現代平和研究会訳, 福村出版, 2003年 (新装第4版)
- ・ 広瀬和子, 「国際社会の変動と国際法の一般化—19世紀後半における東洋諸国の国際社会への加入過程の法社会学的研究」, 寺沢一他編『国際法学の再構築』, 東京大学出版局

#### 6 ナショナリズム

- ・ Anthony D. Smith, *National Identity*, University of Nevada Press, Nevada, 1991
- ・ Robert H. Wiebe, *Who we are A history of popular nationalism*, Princeton, Princeton Univ. Press, 2002
- ・ ベネディクト・アンダーソン, 白石さや, 白石隆訳『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT出版, 1999年
- ・ ホブズボーム (E. J. Hobsbawm), 浜林正夫他訳『ナショナリズムの歴史と現在』, 大月書店, 2001年6月

#### 7 帝国主義

- ・ ホブズボーム (E. J. Hobsbawm), 野口建彦他訳, 『帝国の時代1, 2』, みすず書房1998年
- ・ Lance E. Davis and Robert A. Huttenback, *Mamman and the pursuit of Empire The political*

*economy of British imperialism, 1860-1912*, Cambridge University Press, 1986, (n.p.)

\_\_\_\_\_ : “Public Expenditure and Private Profit : Budgetary Decision n the British Empire, 1860-1912”, *American Economic Review*, 1977, Vol. 67., No.1

- ・ 秋田 茂 「『帝国主義経費論争』をめぐって」, 『大阪外語大学アジア学論叢』 二号, 1992年
- ・ 吉村忠典 「『帝国』という概念について」, 『史学雑誌』 108, No.3. 1999
- ・ 木畑洋一 「イギリス帝国主義と帝国意識」, 北川勝彦, 平田雅博編, 『帝国意識の解剖学』, 1999年, 世界思想社
- ・ 岩井 淳 「『ブリテン帝国』の成立」, 『歴史学研究』, No.776, 2003年3月

#### 8 戦争関連

- ・ 島田謹二氏, 『アメリカにおける秋山真之』, 朝日選書, 1975年
- ・ David F. Trask, *The War with Spain in 1898*, New York, First Bison Boking printing, 1996 (Originally published in New York 1981)
- ・ French Ensor Chadwick, *The Relations of the United States and Spain : the Spanish-American War*, New York, 1911.
- ・ Luis Gómez y Amador, *La Odisea del Almirante Cervera y su Escuadra*, Biblioteca Nueva, 2001

#### 9 その他

- ・ R. B. Mowat, MA, pp. *A History of European Diplomacy* vol 1, London, 1929, Edward Arnold & Co.
- ・ Charles Dupuis, *Le principe d'équilibre et le concert européen de la paix de westphalie a l'acte d'Algésiras*, Librairie Académique, 1909, Paris

(受理 平成18年1月6日)